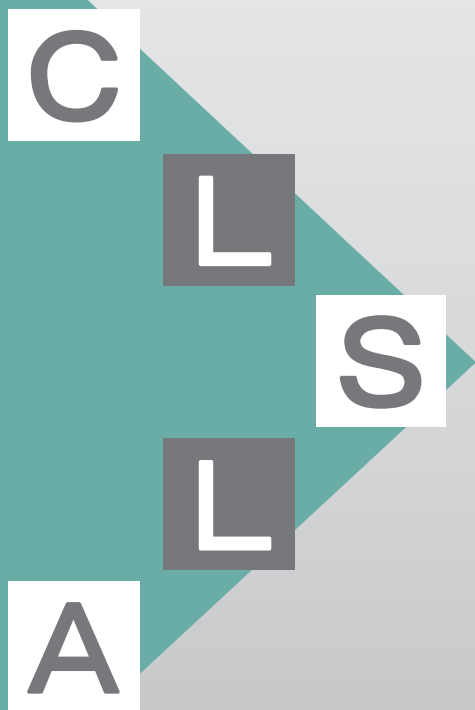


学習支援センター(SLAサポート) 年次活動報告書 2015年度

Annual Report 2015 / Center for Learning Support(SLA Support Office)



東北大学
高度教養教育・学生支援機構
Institute for Excellence in Higher Education,
Tohoku University

学習支援センター（SLA サポート）
年次活動報告書
2015年度

2015年度ダイジェストトピック10

シニア SLA 制度開発 ▶

経験年数の長い SLA を「シニア SLA」とし、SLA 育成の役割を担ってもらうことで、SLA 内の自己成長力の促進を目指す。

[関連ページ ➡ p.83-85]



SLA 学生によるシンポジウム報告 ▶

SLA（学部 4 年生）がシンポジウムで SLA の実践についての活動報告を行った。SLA が公の場で活動報告を行うのはこれが初めてである。

[関連ページ ➡ p.48,90]



後期各種研修・育成体制の強化 ▶

学習支援者としての資質向上のため、「リフレクション」促進をキーワードとした各種ツール・活動・体制の開発や整備に取り組む。

[関連ページ ➡ p.86-88]



◀ 研修合宿

例年通り研修合宿を 9 月に開催。座談会での議論の深まりが印象深い。ワークショップでの提案は後期の活動に実際に活用した。

[関連ページ ➡ p.79-82]



◀ 他大学調査（SLA 同行）

SLA と共に研修体制についての知見を得るべく公立大学はこだて未来大学に調査訪問。メタ学習という理念と研修のあり方は随所でその後の SLA 実践に活かされる。

[関連ページ ➡ p.90]





共通研修試行実施 ▶

SLA 内研修のあり方を模索する中で、担当科目を超えた SLA 共通のスキル獲得を目指す研修会の在り方を模索。

[関連ページ ➡ p.89]

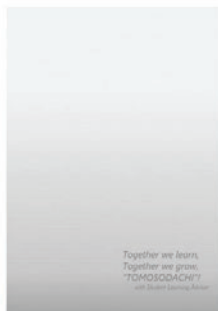
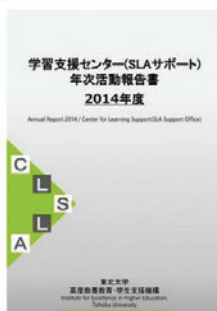


出典： <http://www2.he.tohoku.ac.jp/zengaku/kouken/jyusyou.html>

他大学合同研修実施 ▶

3 年目となる北海道大学ラーニングサポート室との合同研修を開催。今年では中堅・新規層 SLA の参加を促進。

[関連ページ ➡ p.91]



◀ ライティングセミナーの実施

ライティング支援の一環として附属図書館の協力の下、ライティングセミナーを開催。

[関連ページ ➡ p.37,70]



◀ 全学教育貢献賞受賞

センター員 2 名（足立佳菜、鈴木学）にて、2015 年度全学教育貢献賞を受賞。受賞理由として「学部 1・2 年生の学びを支援するプロジェクト（SLA サポート）に当初から中心的に携わり、学習支援に対して実績を伴う多大な成果を上げてい」る点が評価される。



◀ 『年次報告書』発行

学習支援センター発足に伴い、第 1 号となる『年次活動報告書』を発行。2014 年度の活動をまとめた『年次報告書 2014』を発行した。

センターとしての2年目

学習支援センター長

関根 勉

学習支援センターは、東北大学高度教養教育・学生支援機構の発足（平成26年4月）にともない、機構を構成する11センターのうちの一つとして設置されました。本センターでは、スチューデント・ラーニング・アドバイザー（Student Learning Adviser, SLA）システムを主とした運営を行っていますが、これは、学内の高年次の学部生や大学院生がアドバイザーとしての高い意識のもとに、1、2年生の学習支援を行うというものです。“東北大学に学び合いの文化を”作ろうという精神のもと、「**ともと学ぼう、ともに育とう、ともそだち！**」をキーワードとして活発に活動しています。

スタッフとSLAの活躍のおかげで、学習支援センターとしての発足後の2年目をおくることができました。平成27年度年報としてその概要をまとめ、皆様にご報告できることを大変嬉しく思います。

さて、平成27年度はいくつか特筆することがありました。平成27年12月初旬には仙台市営地下鉄東西線が開業し、東北大学川内北キャンパスへのアクセスが改善されました。本センターは川内駅に隣接する建物内にあるので、開通後は最もアクセスの良い場所の一つとなりました。ただし、この地下鉄開業にむけて、駅出入口周辺のキャンパスモールの整備工事が必要であったため、結果的に本センターのある建物の出入口への通路が制限されてしまい、学生が出入りしにくくなった期間がありました。センターの利用がかなり鈍るのではないかと危惧しましたが、終わってみれば年度利用件数が延べ3,000件ほどにもなり、本年度も多くの学生達に利用してもらうことができました。取り越し苦労に安堵すると共に、本センターがより確実に学生に認知されてきたことを自覚いたしました。

また、本センターのスタッフである鈴木 学助手と足立佳菜助手に、東北大学学務審議会より平成27年度全学教育貢献賞が授与されました。そもそもこのSLAシステムは、「全学教育学習支援プロジェクト SLAシステム－スチューデントアドバイザー制度の実践－」（平成22年）としてスタートしたものであり、両助手はその立ち上げ時から中心的に携わってきました。創意工夫をこらした支援方法の企画・開発・実践に尽力し、多数の学生の学習支援に対して成果をあげただけでなく、SLAスタッフの育成・研鑽による質の向上を常に図り、研究大学としての学習支援の場の構築に努めてきました。手前味噌ではありますが、両名の受賞を大変嬉しく思うと共に、センター長として幸せな2年目を過ごさせていただいたというのが偽りのない気持ちです。

ただし、センターとしての2年目はまだ立ち上がったばかりであり、“学び合いの文化”をまさに育み始めたところです。学内外におけるネットワークをさらに大切にしながら、センターの確固たる基盤が築かれていくことを願っている次第です。

目 次

はじめに「センターとしての2年目」	関根 勉（学習支援センター長）	3
◆2015年度事業概要・成果		5
◆論考		
・「利用学生アンケートからみる2015年度の傾向」	鈴木 真衣（センター事務員）	7
・「2015年度 SLA 育成・研修体制改善の取り組み」	足立 佳菜（センター助手）	9
・「SLA 学生の対外的活動参画の意義」	鈴木 学（センター助手）	14
・「授業と連携したライティング支援の試み」	中川 学（副センター長）	17
1. センター概要		21
2. センター活動・実績報告		28
1) 理系科目支援（主に、物理・数学・化学）		29
2) 英会話支援		34
3) ライティング支援		37
4) 自主ゼミ支援		41
5) 授業連携型学習支援		42
6) 利用学生評価		47
7) その他活動（報告・発表、学外調査、訪問受け入れ、広報活動、学内貢献活動）		48
3. 部会活動報告		50
1) 物理部会		51
2) 数学部会		55
3) 化学部会		60
4) 英語部会		64
5) ライティング部会		69
4. SLA の採用&研修の実績報告		74
1) SLA 募集・採用活動		75
2) 活動説明会・活動報告会		76
3) 研修合宿		79
4) 「シニア SLA」制度の開発		83
5) OJT 体制・ツールの開発と実施		86
6) 共通研修		89
7) 他大学調査・合同研修の実施		90
8) 振り返りシートおよび個別ヒアリング		92
5. SLA による活動振り返りレポート		94
◆付録		
A. 利用学生アンケート結果（全データ）		105
B. 研修合宿ワークショップ成果物		124
C. 研修合宿アンケート結果		132
D. 2015年度発行ポスター		137
E. 2015年度活動略歴		141

◎2015年度事業概要・成果

1. SLA サポートシステムの開発・実施

- 目標：① 理系科目支援：前年度ベースの利用者数を維持。SLA の体制強化を図りサポートの質を向上させる。正課教育への情報フィードバックを進め、大学教育改善に寄与する。
- ② 英会話支援：SLA の増員により、支援体制の安定化を図る。
- ③ ライティング支援：ニーズの掘り起こしのための企画実施。支援体制の構築。

■活動・達成状況：

- ① 理系科目支援：前期 37 名・後期 36 名の担当 SLA を雇用。前年度から引き続き、平日に窓口を開設し、個別の質問対応による学習支援を行った。利用者数(のべ人数／実数) 2331／517 名。化学、自然科学総合実験、数学物理学演習（工学部向け）の個別の授業（群）に対して質問対応事例のフィードバックを行った。
- ② 英会話支援：前期 10 名・後期 10 名の担当 SLA を雇用。「英会話カフェ」と「1 on 1 英会話」の 2 形態で学習支援活動を実施。利用者数（のべ人数／実数）651 人／150 名。
- ③ ライティング支援：前期 6 名・後期 5 名の担当 SLA を雇用。個別対応型、セミナー型の学習支援を行い、ポスター作成、予約制、お試し書面对応等の方法を試行的に実施した。利用者数（のべ人数／実数）75／68 名。

全体として、利用学生アンケートでは、平均満足度 95.5 点（有効回答数 1325 件）と高評価。

2. SLA サポートシステムにおける英会話支援（SLAde 英会話）の開発・実施

- 目標：SLA の増員、留学生 SLA の比率を高め、より安定的で多様なサポート体制を構築する。グローバルラーニングセンターと連携を強化し、情報共有と相互の利用斡旋を行う。
- 活動状況：英会話担当 SLA を年間 8 名新規雇用し、前期 10 名、後期 10 名（うち留学生は前期 5 名、後期 6 名）雇用。留学生 SLA の比率は前期 50%・後期 60%を達成した。グローバルラーニングセンターとの連携では、利用推進における運営上の課題解決のため、連携方法を改善した。

3. 学習イベント（企画発信型学習支援）の開発・実施

- 目標：① 専門の枠を超えた学習の機会を創出するため、「雑学ゼミ」を実施する。
- ② SLA 学生と共同し、新たな学習イベントの企画・試行実施を行う。

■活動・達成状況：

- ① 「雑学ゼミ」企画は実施できなかった。
- ② 附属図書館協力の下、「ライティングセミナー」を 5 回実施することができた。参加者の延べ人数は 17 名であり、集客力の向上に課題が残った。

4. 授業連携型学習支援の開発・実施

- 目標：全学教育を対象に授業 SLA を配置し、授業と連携した学習支援体制を構築。
- 活動・達成状況：基礎ゼミの授業を中心に広報を行い、連携教員を募った結果、連携授業は12クラス（教員7人）だった。新たに、グローバルラーニングセンターと連携し、FGL の留学生に対する授業連携型の支援を試行実施した。FGL との連携では留学生3名を授業 SLA として雇用し、数学・生物の教員2名の授業において活動を行った。ただし、活動内容には留学生固有の事情により改善点も多く、引き続き連携の下、改善を図る予定である。

5. 学習支援者（SLA）育成プログラムの開発・実施

- 目標：① SLA の研修を目的とした合宿や他大学との連携研修の機会を設ける。
 ② SLA 学生同士の学び合いを促進することで、持続的な組織運営の基盤を構築するため、「シニア SLA 制度」を構築する。「シニア SLA」は、経験年数の長い博士後期課程の SLA 学生を中心に任用し、センター運営のサポートを担う。
 ③科目別の部会活動を充実させると同時に、共通研修も取り入れる。SLA 育成における OJT の質の向上を図るため、リフレクションを促す仕組みを導入する。
 ④ 学生の力を活用した学習・学生支援組織としての運営強化のため、学生相談・特別支援センターや学内他組織との連携を進める。
- 活動・達成状況：
 - ① 北海道大学アカデミックサポート室との合同研修（2日間）、公立はこだて未来大学メタ学習ラボへの調査訪問などを実施。SLA 研修合宿には、対象 SLA の 47.7%の参加を得て、過去最高水準であった。
 - ② シニア SLA 制度を導入し、6名のシニア SLA を任用。
 - ③ 科目部会は全8回定期開催できた。出席率は前期平均 83.2%、後期平均 65.62%。後期セメスターの運営改善が課題である。共通研修の参加者数は芳しくなく、センターにおける研修の位置づけの見直しが必要である。通常活動における個人および他者・集団の“省察”方法の多様化（ビデオリフレクション、シフト内ブリーフミーティングの実施、リフレクションノートの活用、WEB スタッフブログの活用等）。
 - ④ 理学部・理学研究科キャンパスライフ支援室の協力を得て実施したセミナーでは16名の参加を得、参加者の声としても好評であった。

利用学生アンケートから見る 2015 年度の傾向

鈴木真衣

本稿では、利用学生に記入してもらっているアンケートから、2015 年度の傾向を探った。アンケートの内容は解決・満足・点数・コメントとあり、コメントの記述内容は対象別に大きく 5 つに分けられる。コメントの記述は「わかりやすかった」が多く、また 2015 年度の傾向としては「丁寧」「優しかった」「楽しかった」という記述が例年より目立った。100 点の割合は過去最高を記録した。ただし前期セメスターでは低い点数や不満足・未解決の割合が微増し、後期セメスターで改善したという経緯もあった。

1. 学習支援センターの利用学生アンケート

学習支援センターでは、毎回利用学生にアンケートの記入を依頼している（p.47 及び付録 A を参照）。解決・満足・点数は必須記入、コメントは任意記入としている。ただし全ての利用学生が回答してくれるわけではない。また多忙時など SLA がアンケートを渡しそびれる場合もあり、利用学生数に対するアンケート回収数の割合は本年度で 5 割弱である。

本稿ではこのコメントの記述と解決・満足・点数の値から、2015 年度の傾向を探ることを目的とする。

2. 利用学生アンケートのコメント内容と分類

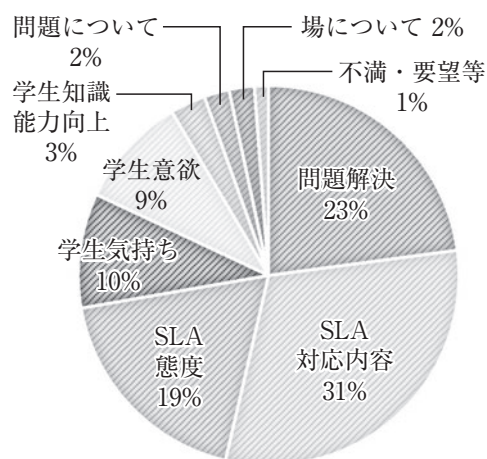
まずコメントの記述について見ていきたい。一番よく見られる記述は「ありがとうございました」という感謝の言葉であるが、それを除くと、記述の内容はその対象別に大きく 6 つに分けられる。分類の仕方に議論の余地はあるものの、その分類は表 1 の通りである。

＜表 1＞コメント内容の対象別分類

対象		コメント内容例	数
問題解決		わかった、解決した、助かった	267
SLA	対応内容	わかりやすい、先輩ならではのアドバイス、時間（すぐ/長時間）、一緒に考える、方針が立つ、意味や本質を説明、自分で話すことでわかる	359
	態度	丁寧、優しい、がんばってくれた、あきらめない	217
利用学生	気持ち	楽しい、面白い、嬉しい、不安、自信、悔しい	114
	意欲	がんばりたい、また利用したい	111
	知識能力向上	勉強になった、できるようになってきた、苦手を克服してきた	35
場について		議論できる、刺激を受ける、挑戦できる、授業ではわからない	25
問題・英会話そのもの		難しい、手ごわい	25
その他		不満・要望等	14

〔注〕2015 年度回収アンケート総数 1432 枚中、感謝のみ・コメントなしを除く 916 枚を分類した。

なお、1 アンケートに分類内容が複数含まれることもある。



＜図 1＞2015 年度コメント内容の割合

3. 2015 年度の傾向

2015 年度のコメント内容の数と割合は、左図の通りである。最も多かったのは SLA の対応内容についてであり、「わかりやすかった」がその半数を占めている。SLA による学生目線の対応が一定程度評価されていると考えられる。また、「一緒に考えてくれた」や「自分で話すことでわかった」というものは、この分類のうち 1 割程度ではあるが、個別対応学習支援ならではのコメントだと言える。

2015 年度の印象としては、「丁寧」「優しかった」という SLA の態度への記述が増加したとい

うこと、「楽しかった」という学生の気持ちの記述の増加が挙げられる。「楽しかった」という記述は英会話利用者に多く見られるが、理系科目支援利用者にもある程度見られ、問題が解けることや先輩と話すことでその感情を抱く学生が増えたようである。

次に、点数の値と解決・満足の回答割合についてである。2015 年度の平均点数は 95.5 点と、前年度平均を 0.7 点上回った。特に 100 点の割合が 7 割に達し過去最高を記録した。

ただし前期セメスターでは、100 点の割合が増加したものの、低い点数の割合も微増した経緯があった。これは後期セメスターで改善され、結果として低い点数の割合は前年度並みとなった。この傾向は解決・満足についても同様であった。解決・満足したとの回答は年間 9 割を超えているものの、前期セメスターでは解決・満足しなかった/どちらでもない、という回答割合が微増していた。

このことに関連して、不満・要望等のコメントが前期セメスターでは例年より見られたのも特徴である。一般的にこのような内容は肯定的な意見より書きづらく、また今まではさほど見られなかった。こういったコメントが寄せられた原因としては、混雑して時間が限られている状態でうまく対応を終わらせられなかった、2 年生の利用割合が増加し難問を対応するケースが前年度より増えた、SLA がうまく利用学生に寄り添えなかった、SLA が大学内で広く認知されてきたために要求の度合いが高まってきた、などが考えられるが、推測の域を脱しない。しかし、上述の事実を業務の始めに伝達したことや混雑が緩和したことが影響したのか、後期セメスターでは状況が改善された。

以上、利用学生のアンケートから 2015 年度の傾向を見てきた。利用学生からのコメントで多かった意見を大事にしていきながら、少数意見の要望等も軽視しないことは重要である。学生のニーズと学習支援活動の方針の折り合いを探りつつ、今後も活動の質を維持・向上させていきたい。

2015 年度 SLA 育成・研修体制改善の取り組み ーリフレクションサイクルの再考ー

足立 佳菜

SLA 活動開始から 6 年目を迎えた 2015 年度「SLA サポート」の最大の目標・課題は、SLA の学習支援者としての一層の資質向上であり、そのための研修体制の見直しであった。これらの取り組みの全体像について、「振り返り（リフレクション）」の促進というキーワードを軸に総括する。

1. はじめに

本稿では、学習支援センターにおいて 2015 年度に実施した SLA 育成・研修体制に関わる取り組みについて、「振り返り（リフレクション）」の促進という観点から、その全体像について考察し、本年度の活動成果と残された課題について総括することを目的とする。対象となる取り組みは、本紙 4-(4)シニア制度の開発、4-(5)OJT 体制・ツールの開発と実施に報告された取り組みである。なお、紙面の都合上、本稿では各取り組み詳細については触れず、その位置づけのみを抽出していくこととする。そのため、各取り組みの内容については本紙を参照されたい。

2. OJT を基盤とした従来の SLA 育成体制の課題

(1) 従来の SLA 育成のための機会

SLA の育成は、活動開始時（2010～）より On the Job Training（以下、OJT）を基本としてその体制を形作ってきた。OJT を基本とする所以は、勤続年数・週当たり勤務時間数がそこまで多くはない SLA の勤務体制の中で¹⁾、学習支援活動の実践自体から最大限の学びを得、より実践に即したスキルを身につけてもらうためである。この方針の下で従来 OJT のメインとしてきた SLA 育成活動が、「対応記録作成」および「対応報告」であった。

「対応報告」とは、SLA が学生対応後に毎回作成する「対応記録」をもとに、センター一員に対し対応の報告を行い、共にその対応について振り返りを行うというものである（足立・鈴木、2016）。実際の事例・文脈に即し、かつ、個々人の課題に即した形で行う指導・育成場面となるこの「対応報告」は、「実践に即した」育成を成立させる上で非常に重要な位置を占めるものであった。また「対応記録」そのものについても、情報共有の媒体としての役割もさることながら、SLA 個々人が「書く」ことを通して対応を振り返るツールとして機能してきた。なお、2015 年度開始時点では記録媒体は 2 種類あり、主として「問題」に紐づく対応記録である「問題カルテ」（紙媒体）と、「利用学生」に紐づく対応記録である「人カルテ」（データ媒体）の 2 つの記録媒体を運用していた²⁾。

この他に、Off the Job Training（以下、Off-JT）として活動初期から継続実施している活動に「部会活動」と学期始・末に行う「活動説明会」「活動報告会」、夏期に開かれる「研修合宿」があるが、本稿では「部会活動」のみを取り上げる。「部会活動」は、担当科目別に編成された SLA のグループ活動であり、通常活動時には顔を合わせるものの少ない同科目担当者同士の SLA が情報交換とスキルアップを図るため、月に一回のミーティング開催を定例として行い、日常の活動を補完・深化する役割を担うものであった。

（2）従来の体制の課題

日常ベースでは、「問題」「学生」の 2 種の「記録」媒体とこれらを基にした「対応報告」、月単位では SLA 同士の学びあいを生み出す「部会活動」という機会を設定し、SLA としての成長を促してきた従来の体制であったが、2014 年度末時点で、これらには次のような課題が顕在化していた。

第一に、SLA の増加・利用者数の増加を基本とする組織の拡大、これに伴う活動内容の拡大を背景に、「SLA を育成する」役割をセンター員 2 名が主力となっていくことに限界が見えつつあったことである。当然ながら、従来も SLA 育成に「先輩 SLA」の力は活かされてきた³⁾。しかし、この点をより明確に、組織的に体制を整える必要性が増してきていたと言える。言い換えるならば、「SLA の経験知の継承・循環の仕組み」をより充実させ、「SLA 集団の自己成長力」を高める必要性が生じてきたということである。

第二に、対応件数の爆発的増加に伴う「記録」作業の負担増の実態である。特に「学生」情報を記録していた「人カルテ」の労力対効果のアンバランスさが SLA から指摘され始めており、より効率性を高めたあり方に改善する必要があった。

第三に、「部会活動」の役割に関する課題である。2014 年度末時点では、「部会」は SLA が他者と共同作業を行う唯一の活動単位であったため、情報共有一つをとっても、問題情報・学生情報・シフト情報・対応情報等々、様々な次元の情報共有を部会に担わせる構図となっていた。もちろん、これらの総合的な情報共有が必要ないわけではないが、共有すべき事項が拡大するにつれ目的意識も曖昧となり、かつ、「科目（専門分野）」を同じくするメンバーが集まるという「部会」の適性とそれが担う役割の間に齟齬が生じ始めていたことが課題であった。

第四に、同じく「部会活動」についてであるが、定例会が“月に一度”という頻度で開かれることに関する課題である。これには 2 つの意味がある。1 つは、センター員側の課題意識として、先の第一の課題と「部会」が唯一の他者とのまとまった議論の場であったことが相まって、部会定例会よりも短期的なスパンで、より日常的に SLA 同士が対応について検討する場を設ける必要性を感じつつあったこと。1 つは、主として SLA 側のニーズとして、難易度の高い「問題」情報について、より短期的な情報共有が必要であるという認識が広まってきたことである。もちろん、「対応記録」は常時閲覧可能な形とし

ているため、自身の勤務の際に情報は取得できる。しかし、他者との直接的なやりとりで検討する必要のある事例ほど、“月に一度”という頻度が適さないという課題が顕在化しつつあった。

3. 2015年度の「リフレクション」活性化の取り組み

こうした課題状況を背景として2015年度に取り組んだSLA育成体制改善のキーワードが「振り返り（リフレクション）」であった。SLA実践の中で描いたリフレクションサイクルが図1である。また、この中から「記録」～「検討」の過程について、「問題」に紐づく情報と「学生」に紐づく情報に2分し、各種ツール・機会を対応させたものが図2である。この図の中に、本年度の取り組みである「シニアSLA」「ビデオリフレクション」「サッカーノート」「スタッフブログ」「ブリーフミーティング」がどのように位置づくかを整理する。

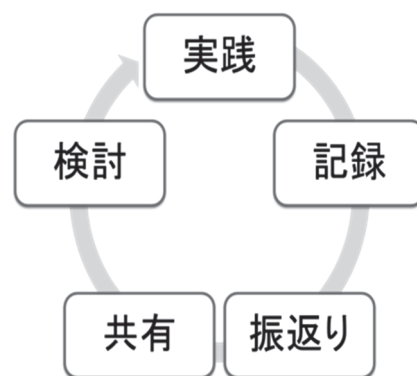


図1. リフレクションサイクル

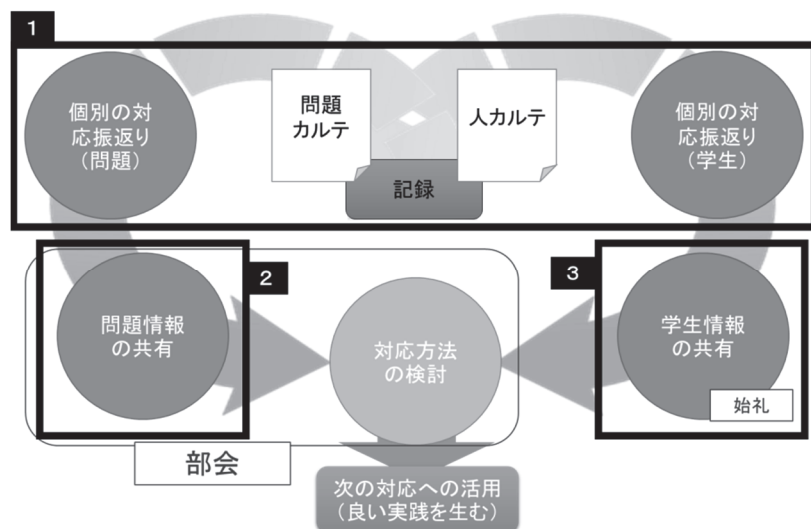


図2. リフレクションサイクルの一部と各種ツールの対応

(1) 「サッカーノート」「ビデオリフレクション」—個のリフレクションツールの多様化

「サッカーノート」「ビデオリフレクション」は、SLA 個々人のリフレクションをより充実させるツールであった。図に即して言えば図2の1にあたる部分の新たな媒体である。新たな媒体の追加は「記録」負担増の課題状況と一見矛盾して見えるが、「人カルテ」の廃止と「問題カルテ」の洗練を同時に行うことで実現させた。また、これらの導入

は、「問題」や「学生」を軸とした記録はあるが「SLA」を軸とする記録媒体がないことへの気づきから、自身の活動を自分自身で振り返ることを奨励する装置として取り入れた側面もある。つまり、リフレクションサイクルのベースとなる SLA 1 人 1 人の振り返りをより活性化させるための 2 媒体の導入であった。

なお、「ビデオリフレクション」は当初個別の振り返りの促進材料として考えていたが、実際の活動の中では、部会活動の一部として取り入れる事例も現れ、集団の振り返りにも活用される可能性が示唆される結果となった。

(2) 「スタッフブログ」―「問題」情報共有の即時性強化

「スタッフブログ」の活用は、図 2 の 2 を改善する取り組みであり、上述の課題 4 に直接応える対応策である。これにより、よりタイムリーな他者との情報共有（特に、「問題」情報）が可能となった。

(3) 「ブリーフミーティング」―「学生」情報共有の促進と新たな“他者”の創出

「ブリーフミーティング」は、直接的には図 2 の 3 を促進させるものとして設置された。第二の課題（「記録」の負担増）への対応策が「人カルテ」の廃止を伴うものであったことは先に述べたが、「利用学生」への関心と継続的理解の必要性、そしてそれを組織全体で共有することの重要性に変わりはない。そこで、継続利用の学生の多くが同曜日・時間帯に SLA を利用する傾向があることに着目し、「学生」に関するリフレクションを「シフトメンバー」を構成単位とする「ブリーフミーティング」に担わせる体制へと転換したのであった。

(4) 「シニア SLA」―リフレクションサイクル全体を回す促進役

シニア SLA は、2 で述べた第一の課題への対応策として開発が行なわれた。センター員と SLA の媒介者、SLA と SLA の媒介者として位置づくシニア SLA は、センター員よりもより身近に、より専門的内容にも踏み込みながら、個々の SLA の成長を促す役割を担う存在である。SLA の育成に関わるシニア SLA の主な活動は、個々の SLA からの「対応報告」を受ける役割と SLA 同士の日常的議論の火付け役となることであった。つまり、個のリフレクションと SLA 同士のリフレクションを促進することがシニア SLA の役割であり、これをリフレクションサイクルの中に位置づけるならば、サイクルの全フェーズに関わりながら、サイクルそのものの回す役割として位置づけることができる。

4. 2015 年度 SLA 育成体制の成果と課題

以上、2015 年度の SLA 育成体制に関わる新たな活動についてみてきたが、これらの取り組みを総括すると、本年度新たに取り入れた SLA 育成に関わる活動は、いかにより日

常の活動の中でのリアルタイムなリフレクションを活性化させるかに注力したものであった。そしてその成果としては、日常的なリフレクションを実施・促進するための“機会”・“ツール”・“媒介者（他者）”の多層化・多様化を図ることができたといえる。特に、従来主流としてきた「科目」単位のグループとは異なる「シフト」単位のグループが、新たな「チーム」として台頭してきたことの意味は大きい。これにより、OJTに基づく研修・育成体制の核となる日常的なリフレクションを支える土壌を生み出すことができた。

ただし残された課題も多い。取り組みごとの改善点の詳述はここでは割愛するが、全てに共通する課題としては、「リフレクション」そのものの意義についてSLA内の共通理解を図ることが必要である。特に、他者と気づきを共有し、組織全体としての振り返りサイクルを円滑に進めるためには、SLA一人一人がそのサイクルを駆動させる当事者であることに自覚的になる必要がある。この点について改善を図っていきたい。

加えて、ここに述べてきた取り組みはOJTの充実を図ることを主目的としてきたものであるが、Off-JTをバランスよく取り入れていくことも今後の課題である。具体的には、全SLAに共通する「学習支援」への知識理解の充実をどのように図っていくかという課題であるが、この点に策を講じて試行したのが「共通研修」（本紙89ページ）であった。本年度の「共通研修」の試行からは、運用面の種々の課題・制約が明らかになったが、これらの知見をもとに、次年度も実践の改善を重ねていきたい。

最後に、ここまで「振り返り（リフレクション）」の主体をSLAに置いてきたが、「振り返り」が必要なのはセンター（員）も同様である。その際、SLAの「振り返り」はセンター員にとって重要な情報となる。そのため、組織全体の「振り返り」構造を機能させる上では、SLAとセンター員間の振り返りの“接続”が重要な要素となる。このことも踏まえながら、リフレクションサイクルのさらなる改善・向上を目指していきたい。

〔注〕

- 1) SLAの平均勤続年数は1年半。週当たりの勤務時間数は、週1日3～5時間が基本である。
- 2) 「人カルテ」については、活動開始当初から導入していたものではなく、2013年度にSLA行動指針の一つ「問題ではなく人を見る」を強化する目的で取り入れたものである。
- 3) 新規メンバーに対するメンター制の導入、先輩・後輩のバランスを考慮したシフト編成等。

〔参考文献〕

足立佳菜・鈴木学（2016）「学習支援者のための「振り返り」観点とプロセスの創出—東北大学学習支援センターのSLA実践を事例として—」、『大学教育学会誌』第38巻第1号，pp.127-136

SLA 学生の対外的活動参画の意義

鈴木 学

2015 年度は SLA の活動開始から 6 年目を迎え、SLA 学生の学年構成も最も幅広いものとなった。学部 3 年生から博士課程後期 3 年生までを有する本組織において、日常的な学習支援活動以外に実施している対外的な諸活動が有する効果について考察する。

1. はじめに

2015 年度に実施した対外的な活動として、①広島大学主催シンポジウムでの報告、②公立はこだて未来大学メタ学習センター調査訪問、③北海道大学との合同研修が挙げられる（実施概要は pp.90-91 参照）。これらは、①はシンポジウムでの報告依頼を受ける形で、②ではこちらから調査訪問を依頼する形で、③は 2013 年度より継続している研修会という形で、それぞれ異なる形態で学生（SLA）が参画した対外的な活動である。

しかしながら、いずれも外部の他者に対して SLA 学生自身が本センターの活動を総括し説明したり、他機関の活動と自身の活動を比較・分析したりする点において共通しており、このような活動が SLA 学生にどのような影響を与え得るのかを本稿では考察したい。

2. 各種対外的活動を経た SLA 学生の思考

(1) 広島大学主催シンポジウムに参加した SLA 学生の場合

シンポジウムで報告を行った SLA 学生（物理担当 B4）は、学習支援センターの SLA の意義を、支援学生の学習を『つらい学び』から『楽しい学び』へと移行させることに見出している。支援学生の興味関心や理解度に応じて、対応の在り方を変えられることが SLA の強みであると認識していると同時に、それをできるように（支援学生の「今の学び」と「興味関心」を結び付けるための具体例な引き出しを増やせるように）成長していかななくてはならないという課題意識も有している。

一方で、研修の一環として同行させた SLA 学生（化学担当 M2）は、「学生支援」と「学習支援」の違い・特殊性を意識するきっかけとして本シンポジウムを位置付けた上で、SLA における対応の「標準形」を明確化することの必要性を実感している。加えて、SLA による学習支援には否が応でも「教科の専門性」が求められる中で、SLA の目的が「正解を教えること」ではなく「先輩の姿を見せること」「学習の相談役になること」であり、その目的に基づいた環境が設計されている現状を稀有であると捉え直している。以上の点に関しては、「学習支援の場として SLA だけを見ていると気づきにくい」ということを本人が明文化している。

論
考

(2) 公立はこだて未来大学への調査訪問に参加した SLA 学生の場合

本調査訪問では目的を、①学習支援者育成システムに関する知見を得ること、②ITTPC (International Tutor Training Program Certification) 国際チューター育成プログラム実施状況についての調査とした。同行した SLA 学生 3 名 (物理担当 M1、数学担当 D1、物理担当 D2) による分析結果をまとめると、①学習支援センターにおける現研修体制の意義と課題、②メタ的思考での議論の必要性、③リフレクションサイクルの構築、④“型”の共有の 4 点が挙げられる。

まず①に関しては、物理的制限 (立地条件や大学の規模等) による本センターでの研修体制の限界性について分析した上で、SLA 学生の学習支援者としての成長に対するモチベーションを向上させるための方策について検討を行っている。次に②では、研修の効果を高めるために必要なこととして、SLA 学生一人ひとりが学習支援をメタに位置付けられるようになることを提言している。これは学習支援に関する知識や技術の獲得だけでなく、学習支援の指向性といった意識の醸成を同時に行っていくことを示している。そして③は、学習支援の目標設定・実行・評価のプロセスを SLA 自身が繰り返すことで、自身・他者の思考を客観化し相互理解を促進することができるとしている。最後に④では、SLA 同士や支援学生との間で意味あるディスカッションを実施するために、必要最低限かつ成長の下地となる“型”を全体でより強調する必要性を説いている。

(3) 北海道大学との合同研修に参加した SLA 学生の場合

北海道大学 LSO (Learning Support Office) の学習支援システムとそれを担うチューター学生との比較を通じて、研修に参加した 6 名の学部 SLA 学生は本センターにおける学習支援システムの本質的な理解を深めたといえる。具体的には、①センター専任スタッフの存在意義の理解、②物理的な学習支援環境の理解、③支援対象学生の理解、④本学の正課カリキュラムの理解、⑤SLA 雇用制度の理解、⑥「(特に SLA 同士の) ともそだち」の理解、⑦研修・育成の仕掛けへの理解等である。これらは彼らが SLA として活動する上で日常的に存在する諸々であり、疑う余地のない本センターの学習支援システムである。若手の SLA 学生は初任者研修や OJT にてこの意味を一度は理解しているが、この機会を通じて自分自身で改めて問い直すことによって各種活動に対する理解の定着が図られている。

3. 考察

以上より、SLA 学生を対外的な活動に参画させることで得られる効果として、①自分自身の SLA 観 (≡学習支援観) を形にする効果、②日常の学習支援活動における「あたりまえ」を検討し、意義付け、課題を見つけ出す効果、③活動成果を「全体」へと還元しようとする当事者意識向上の効果が挙げられるだろう。SLA 学生の志向性や学年等によ

っても効果の程度は異なるが、総じて学習支援者としての当事者意識の醸成に寄与していることは確かである。しかしながら、一口に対外的な活動への参画による効果と言っても、事前の目標共有や情報収集、当日のシミュレーション、さらには対外的活動の成果を事後にどのように活かしていきたいのかというビジョンを全体で共有すること等といった「レディネス形成」とセットで本来検討されるべきであろう。実際に、対外的な活動にSLA学生を参画させるに際し、マネジメント側は様々な仕掛けを講じている。しかし、本稿ではその点の記述が不十分であり、残された課題として引き続き検討を加えなければならない。

〔参考資料〕

広島大学主催シンポジウムレポート 2 編（奥田貴「広島での学生シンポジウム『大学と学生』での報告、参加を通じて学んだこと」、山下琢磨「広島大学での研修を振り返って」）
公立はこだて未来大学調査訪問レポート 3 編（五十嵐聡「公立はこだて未来大学調査訪問レポート」、中村聡「はこだて未来大学調査訪問報告書」、北原理弘「はこだて未来大学におけるチューター研修制度の調査報告」）
北海道大学合同研修会レポート 6 編（浅野喜敬「北大合同研修を終えて」、代友輝「北大合同研修の報告書」、大藏聖「2015 年度 LSO・CLS 合同研修会レポート」、澁川友菜「北海道大学合同研修を終えて」、吉田光秀「北海道大学（LSO）、東北大学（CLS）合同研修会の報告」、珍田一馬「北海道大学（LSO）・東北大学（CLS）合同研修会参加報告書」）

授業と連携したライティング支援の試み コンサルティングシートの活用と効果

中川 学

学習支援センターでは、授業とライティング支援を連携するツールとして、コンサルティングシートを開発し、それを活用した学習支援を試行した。コンサルティングシートとは、学生が SLA によるライティング支援を受けたことを証明するもので、教員はこれを通して支援の概要などの関連情報を知ることができる。本稿では、学習支援センターのコンサルティングシートの概要について紹介するとともに、同シートを活用した授業を素材として、一教員の立場からその効果について報告する。

1. はじめに

学習支援センターでは、2014 年度から個別対応型のライティング支援を開始した。新たにライティング支援のための SLA を 4 名採用し、時間を限定して窓口対応をおこなったものの、利用者数は極めて少なく（年間でのべ 26 名）、授業との連携強化が課題となっていた（学習支援センター 2015）。

これを受けて、2015 年度には、センタースタッフが授業との連携を強化するツールとして、コンサルティングシート（以下、コンサルシートとする）を開発し、それを活用した学習支援を試行した。コンサルシートとは、学生が SLA によるライティング支援を受けたことを証明するものである。学生はこれをレポート等に添付して教員に提出し、教員は支援の概要などを知ることができる。学習支援センターでは、コンサルシートを授業（教員）と課外学習（学生）とセンターをつなぐ装置として位置づけ、主に授業担当者へのサービスとして、これを活用した学習支援を開始したのである。

さて、ここで先行する取り組みに目を向けてみよう。例えば、関西大学ライティングラボでは、2014 年から利用学生の情報・利用日・チューターによる指導内容等を教員へフィードバックするため、ラボ利用証明書を発行している（小林 2016）。これはコンサルシートと同趣旨の取り組みで、ライティング支援の内容を教員へフィードバックすることにより、授業との連携を深め、学生の学習成果を高めようとする動きが始まっていることがわかる。さらに関西大学ではルーブリックなど複数の支援ツールを用いて、学習成果を可視化する試みを進めると同時に、その効果検証を開始している点も注目される。この学習支援の取り組みに効果測定を組み込む手法は重要で、本センターのコンサルシートに関しても、学生と教員の立場からの効果測定が必要不可欠といえる。

上記の問題意識を踏まえて、本稿では学習支援センターのコンサルシートの概要について紹介するとともに、同シートを活用した筆者の担当授業を素材として、一教員の立場からその効果について報告することとしたい。

2. コンサルシートの概要とシート活用授業

(1) コンサルシートの概要

学習支援センターではまず、1・2年向けの全学教育担当が多い高度教養教育・学生支援機構の教員に向けて、コンサルシートの活用に関する募集をおこない、筆者を含む2名の教員から利用申請があった。申請にあたり、教員は授業科目名・対象学生（学年・学部）・レポート提出日・関連情報をセンターにメールで送付する。関連情報とは、受講者数・レポート課題・書式等の指示文等で、SLAによる円滑なライティング支援のために事前送付を促している（任意）。センターによる承認の後、教員は受講生に対してセンターの利用指示をおこなうこととなる。

コンサルシートはB7サイズの小さなカード（図1）で、そこには①利用学生に関する情報（氏名、センターの利用回数）、②利用日と担当SLAの氏名、対応時間、③レポートの進捗状況と対応内容、④ライティング支援の概要が記載される。これらの情報は担当SLAがすべて記入するもので、シートは対応の終了時、利用学生に手渡される。つまり同シートからは、いつ誰がどのような段階のレポートを持参して相談に訪れ、それにSLAがどのような対応をしたのかがわかるのである。さらに、③の対応内容はレポート全般、問い・テーマ設定、文章表現、形式・ルール、構成・章立てなどに分けられ、④では具体的な支援内容がSLAによって記入される。これらのうち、学習成果の測定という観点から重要なものは③・④であり、これらが本稿の分析対象となる。

SLA ライティング コンサルティングシート	
対応日時	2016年 月 日 () 時間 : ~ :
学生氏名	利用回数 初めて ・ 2回以上
担当SLA	
執筆段階	<input type="checkbox"/> 執筆前 <input type="checkbox"/> 執筆途中 <input type="checkbox"/> 執筆後
対応内容	<input type="checkbox"/> 1. レポート全般 <input type="checkbox"/> 2. 問い・テーマ設定 <input type="checkbox"/> 3. 文章表現 <input type="checkbox"/> 4. 形式・ルール <input type="checkbox"/> 5. 構成・章立て <input type="checkbox"/> 6. 文献・資料検索 <input type="checkbox"/> 7. PCの使い方 <input type="checkbox"/> 8. その他 ()
概要	

本学生は、SLAサポート(ライティング)を活用し、レポートの改善・向上に取り組んだことを証明します。
 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター(SLAサポート)

図1. コンサルティングシート

(2) シート活用授業

筆者は2015年度担当授業のうち、前期の基礎ゼミ「フィールドワークの日本史」（受講生は1年生10名）、後期の「東北大学を学ぶ」（同1年生20名）をコンサルシート活用授業として申請した。ともに期末レポートを課した1・2年向けの全学教育科目で、後者は複数クラスのなかから少人数クラスを選んだ（支援窓口の混雑回避のため）。

レポートの課題は双方とも、授業に関連する材料を使って論証するタイプである（例えば、後者の課題は「本授業のなかで扱った問題のなかから、テーマを設定し、タイトルを付けたうえで自由に論じなさい」）。受講生に対しては、課題、評価項目と配点、分量、書式等の指示を明記したレジュメを配布し、レポート提出条件として、センターのライティング支援を受けて、コンサルシートをレポートに添付することを指示した。上記レジュメは対応するSLAへの事前情報としてセンターへも送付した。

3. ライティング支援の内容とその効果

(1) コンサルシートにみるライティング支援の内容

表1は、上記2授業に関するコンサルシートの③対応内容欄にSLAが記したチェックを集計したものである（複数回答あり）。支援内容の件数からみると、「フィールドワークの日本史」の場合、構成・章立て、形式・ルール、文章表現の順、「東北大学を学ぶ」の場合、構成・章立て、文章表現の順、形式・ルールの順で、これら3点に関する支援が中心となっていた傾向を読み取ることができる。

SLAが支援の総括として記した④概要の記述からも、それが裏付けられる。例えば、構成・章立てに関しては、「『はじめに』と『おわりに』の整合性を確認した上で体裁をチェックしました(指示通りになっているかどうか)」、「本人の課題意識に基づき、構成を検討」、文章表現や形式・ルールに関しても「音読しながら文章表現の確認」、「引用の仕方や参考文献の書き方について説明」といったコメントが確認できる。

センターがライティング支援の証明書に「コンサルティング」を用いていることからわかるように、SLAによるライティング支援は、「添削」をするのではなく、学生の相談にのり、学生とともに考え（思考の整理）、専門的な助言をおこなうことを重視している。これは「ともそだち」というSLAの理念を踏まえ、早稲田大学ライティングセンター等の文章チュータリングの手法を取り入れたものといえる（佐渡島,太田 2013）。SLAが学生との対話を踏まえて、そのニーズや状況を把握し、レポートの構成・章立て、形式・ルール、文章表現に重点を置いたライティング支援に取り組んでいたことが、コンサルシートから読み取れるのである。

表1. コンサルシートにみるライティング支援の内容

支援内容	レポート 全般	問い・テ ーマ設定	文章表現	形式・ ルール	構成・ 章立て	文献・ 資料検索	その他
フィールドワークの日本史	2	2	5	6	8	1	0
東北大学を学ぶ	5	4	11	8	15	1	1

[注] 支援内容は複数回答あり。「フィールドワークの日本史」は受講生10名、「東北大学を学ぶ」は受講者20名のうち2名がコンサルシートを添付していなかったため、18名分のデータとなっている。

(2) ライティング支援の効果

ライティング支援の効果を測定する調査手法としては、複数の同じ授業・同じレポート課題でライティング支援の有無をもって比較する、あるいは個々のレポートについて、支援の前後で比較検討することが有効と考えられる。これについては今後の課題とし、以下では僅かな事例からではあるが、効果とみられる点をあげておく。

第一に、ほぼすべてのレポートが序論・本論・結論という基本的構成をとっていたこと、第二にタイトル、参考文献・引用文献リストなど、基本的形式が整ったレポートが多くみられるようになったことがあげられる。筆者はこれまで学生にレポート課題を提示する際、学習支援冊子『ともそだち本』（学習支援センター 2014）所収の「レポートの書き方」「レポートチェックリスト」などをレジュメとして配布し、10分程度のレクチャーを実施してきた。とはいえ、これらの情報提供が機能していたとは言い難く、序論や文献リストのないレポートも少なからずみられた。

しかし、今回の事例からは、SLAのライティング支援を受けることにより、レポートの基本的構成・形式という側面で学生のライティング力の向上が確認できた。コンサルシートを活用したライティング支援は、教員が学生に対して半ば強制的にセンターの利用を促すものではあるが、それは教員だけでなく学生にとってもメリットがある有効なツールと考えられるのである。

4. おわりに

最後に、コンサルシートを活用したライティング支援の課題に言及して稿を閉じたい。前述のように、レポートの基本的構成・形式の向上という点では効果がみられたものの、特に引用の方法、出典の表記、パラグラフの構成等で改善の必要なレポートも散見された。最低限の質保証のラインをどこに設定するのか、授業との連携という側面からいえば、コンサルシートを活用した教員からセンターへのフィードバックもまた不可欠であろう。そもそもコンサルシートを通して教員が得たい情報とは何なのか、教員がセンターに求める支援はどのようなものなのかー支援内容の優先順位などーなども検討を要する課題かもしれない。今後の改善に期待したい。

〔参考文献〕

- 小林至道(2016)「関西大学ライティングラボの取り組みを通して大学教育のイマドキを考える」(大学コンソーシアム京都 第21回FDフォーラム第10分科会「大学におけるライティングセンターの役割」発表資料), <http://www.consortium.or.jp/wp-content/uploads/fd/15454/12-21thfdf-bunkakai10.pdf> (参照 2016/08/01)
- 佐渡島紗織,太田裕子(2013)『文章チュータリングの理念と実践』, ひつじ書房
- 東北大学高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター (2014)『SLA 利用案内&全学教育 学習支援 BOOK ともそだち本』, 東北大学高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター
- 東北大学高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター (2015)『学習支援センター年次活動報告書 2014 年度』, 東北大学高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター

1. センター概要

学習支援センターは、2014年度の高度教養教育・学生支援機構の発足に伴い設立された業務センターの一つである。その前身となったのは、高等教育開発推進センターにおける「SLA サポート室」の活動(2013年度)であり、さらにはそれ以前の「全学教育学習支援プロジェクト—SLA (Student Learning Adviser) 制度の実践—」(総長室付け、2010年度～2012年度)の活動が土台となっている。

(1) 理念・使命

学習支援センターの使命には、次の3点を掲げている。

- (1) 学生の主体的・自律的な学習を、実践的に促進・支援し、研究大学で学ぶ学生としての資質を育成する。
- (2) 初年次教育や学習支援に関する国内外の動向を調査研究し、東北大学の学習支援の質的向上に寄与する。
- (3) 教職員・学生の中に「学び合い」文化を醸成し、学習共同体(ラーニング・コミュニティ)の形成に寄与する。

2014年現在、学習支援センターの支援対象は学部1・2年生であり、1・2年次学生にとって、“学び”という観点で最も身近な組織であることが、本センターの役割である。また、本センターの学習支援の特徴は、学習支援主体が「SLA (Student Learning Adviser)」と呼ばれる学生スタッフであることにある。「学生による学習支援」の在り方を模索し、開発していくことも本センターの使命の一つである。

(2) 事業

学習支援センターが行う業務は、次の4点である。

- (1) 全学教育段階のリメディアル・レベルアップ学習支援の開発・実践を行う。
- (2) 学習支援の組織開発および支援者育成システムの開発・実践を行う。
- (3) 情報還元による正課カリキュラムの改善・充実に貢献する。
- (4) 全学教育範囲における学習支援ネットワーク(部局間連携体制)を構築する。

本センターでは、高大接続の円滑化と大学教育における学びの実質化に対応するため、大学初期段階での学びのスタート・アップ支援の充実方策を提案・実施する。大学4年間につながる基礎創りを大学での学びの出発点である1・2年次に行うことが重要である。その際、研究大学における支援としては「リメディアル」的支援と同時に、「レベルアップ」的支援を開発・実施していく。

また、研究大学において、「学生同士の学び合い」を核とした学習支援を組織することは、本センター固有の特徴である。この組織開発の一環として教育専門スタッフ(教職員)の充実を図るため、

教育（実践）志向型大学教員の在り方を模索・提言する。また、支援主体学生として「学習意識の高い先輩学生（学士課程後期学生、大学院生）」を育成することが本センターの鍵である。この教育支援人材育成システムの開発・提案を行う。

なお、本センターでは、学習支援活動を①個別対応型学習支援、②企画発信型学習支援、③授業連携型学習支援、④自主ゼミ支援の4形態で展開している。このうちの①・②における具体的な支援内容は、主に物理、数学、化学、英会話、ライティングの5分野（セクション）である。

[個別対応型学習支援]

学部1～2年生からの個別の学習相談・質問に対応する形態の支援。SLA ラウンジに待機しているSLAが平日2～5限の間、主に物理・数学・化学・ライティングの質問に対応している。

[企画発信型学習支援]

個別対応型のように質問を待つ形ではなく、SLAから学びの機会を提供する活動の総称である。主に英会話支援の活動や学習イベントの開催がこれにあたる。

[授業連携型学習支援]

TAのような形で授業ごとにSLAを配置し、担当授業の受講生を対象として学習支援を行う。具体的な活動内容は、連携する授業毎に異なる。

[自主ゼミ支援]

自主ゼミ活動をしている・したい学生を支援する活動。具体的には、①活動場所の提供、②備品貸出、③相談受付、④自主ゼミ交流会の実施などを行うことで、活動の円滑化・促進を図っている。



<図 1-1. 学習支援形態による概念図> * 学習支援センターHPより

（３）SLA とは

SLA（エスエルエー）とは、Student Learning Adviser の略で、東北大学における学生による学生のための学習支援スタッフのことを指す。主に学部３年生～大学院生の幅広い層の先輩学生たちが、SLAとして全学教育を受ける学部）１・２年生の学習サポートを行っている。SLAによる学習支援のコンセプトは学生同士の“学び合い”である。「ともと学ぼう、ともに育とう、『ともそだち』 Together we learn, Together we grow,TOMOSODACHI!」をキーフレーズに、学習支援を行っている。

—“先輩の力”の考え方

SLA を核とする本センターの学習支援は、「先輩の力」を活用したサポートであることが特徴である。これまでの活動から、「先輩の力」には次のような有効性がある。

①わからなさや面白さへの共感

学部１・２年生にとって、教員へ質問することは物理的にも感情的にも思いのほかハードルが高い面がある。そのような大学の環境において「先輩」という存在は、学問について誰かに聞くという行為を身近にしてくれる良さがある。また、つい数年前までは学部１・２年生だった「先輩」たちは、その経験から、どこでつまづきやすく、何がわからないのかの“ツボ”を教員よりも熟知した存在であると言える。同時に、わからなさだけでなく、面白いと感じる“ツボ”についても、同世代ならではのアンテナを働かせて共感できる。利用学生から「一緒に喜んでもらったのが嬉しかった」という声も聞かれ、そんな素朴な「喜び」を自然と生み出せるのも「先輩」が有する潜在的な力である。

②ロールモデルとしての少し上の先輩たち

キャンパスが点在する東北大学では、１・２年生が少し上の先輩が学ぶ姿を見られる機会は少ない。そのような中で、先輩学生である SLA たちは、「大学での学び」に苦勞をしたり楽しんだりした様々な経験を持ち、いずれも「大学での学び」に何かしらの意義を感じそれを志そうとする学生たちである。そんな先輩の姿や経験値に触れることで、１・２年生たちは自分なりの大学での学びの過程を思い描くヒントにすることができる。

③共に考える存在

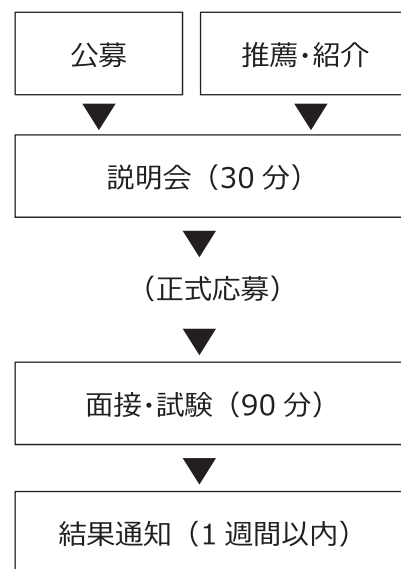
SLA は、先輩として後輩をサポートできる存在であるが、その一方でやはり学生であるため、必ずしも質問に的確に答えたり、ベストな方法で教えたりできるわけではない。試行錯誤しながら、質問に来る学生たちと「共に考える」という光景も、質問対応の場ではよく見かける光景である。この姿勢が自然と成り立つのは、大学での学びの過程を共に歩む学生同士だからこそである。利用学生から聞こえてくる「答えだけでなく考え方を教えてくれる」「（自分自身が）成長できた感があって嬉しい」といった声からは、「共に考える」という、教え—学び合う支援の在り方の意義を感じることができる。



（４）SLA 採用・育成体制

①採用の流れ

募集～採用活動の流れは、次の通りである。募集は、公募制と主に SLA による推薦・紹介制を併用している。ただし、公募と推薦・紹介の違いはファーストコンタクトの違いだけであり、以降の流れや内容に違いを設けてはいない。SLA の活動に興味を持った学生には、まず 30 分程度の「説明会」を受けてもらう。SLA の活動の様子を知ってもらい、希望と実態のミスマッチを防ぐ目的である。「説明会」後、正式な応募の手続きが必要となる。正式な応募を受けた後に、個別に「面接＋試験」を実施する。「面接」は約 30 分の所要時間で、a)志望動機、b)支援（教育）観、c)学習観、d)人となりに関する幅広い質問を行う。その後、約 1 時間の所要時間で「試験」を実施する。「試験」は、理系・ライティング・英語によって形態が異なるが、筆記試験は一部であり、口頭試験を多く取り入れている。



＜図 1-2. SLA 採用までの流れ＞

②育成指針

2010 年度の SLA 活動開始以来、SLA 活動コンセプトとして掲げているのが、「ともと学ぼう、ともに育とう、『ともそだち』である。このコンセプトには、「学生の力を活用した学習支援」を行う組織として、大きく 3 つの意味が込められている。1 つは、利用学生（主として学部 1・2 年生）の中に「学び合いの文化を生む」ということ、1 つは、学部 1・2 年生を支援することを通して、SLA 自身も学ぶということ、1 つは、SLA 同士も学び合い高め合おうということである。SLA は、「正解を知る」存在でもなく、「知識を教授する」（だけ）の存在でもない。対象学生自身が学び・学び合う力を身に付けていくサポートをすることが SLA の役割である。そして、「学生」であることの良さを活かし、学習支援のあり方自体を考え変革していくことも、SLA に期待されている役割である。

こうした理念に基づき、SLA には次の 4 つを「行動指針」として示している。

＜SLA 行動指針＞

- ① 問題ではなく人を見る
- ② 答えを教えるのではなく考えさせる
- ③ SLA 同士のチーム力を大事にする
- ④ SLA のあり方自体を共に考える

また、研修のあり方としては、次のようなポリシーを SLA には示している。すなわち、SLA として活動する上では、①学問（専門）スキル、②教育スキル、③対人スキル、④社会人スキルが必要である。このうち、①については、採用された時点で最低基準は満たしている・またはその見込みがあるものとして、「育成の対象」としては重要度が低く自己研鑽に負うものとしている。センターとしては、②・③を中心としながら①以外のスキルについての研修を行うという方針である。その研修方法としては、個別指導と OJT を基本とすることを掲げ、センター員だけでなく、先輩 SLA の力も借りながら、実践・現場に即したスキルの獲得を目指すものとされている。

この前提の下、「研修の機会」として位置づけているのは次のような活動である。

①新規向け活動説明会 ②メンター制 ③活動レポート（アンケート） ④部会活動
⑤研修合宿 ⑤日常的機会 a)活動記録の作成と対応報告 b 始礼 c)シフト

この他、2015 年度は、SLA 育成を担う「シニア SLA 制度」の開発や、OJT による研修をより充実させるための活動を行い、上記のラインナップを増やしていったこと自体に特徴がある。

②部会活動

上記の中で SLA にとって重要な位置を占める「部会活動」の性格は以下の通りである。

学習支援センターでは、SLA の担当科目（物理、数学、化学、英語、ライティング）毎に部会を設置している。部会活動の主な目的は、①SLA の交流促進、②科目に紐づく対応スキルの向上、③SLA 全体のチーム力の強化（情報共有促進を含む）の 3 点である。部会活動の定期的な活動は、毎月 1 回（90 分）の定例会の開催である。定例会は二部構成を基本としており、前半 45 分は 1 カ月の間の情報共有、後半 45 分は勉強会としている。また、各部会には「部会長」が決められている。

なお、部会活動は、SLA 学生たちの完全な自治運営で行われる類の活動ではない。部会（定例会）への参加を SLA にとっての研修の場の一つとして位置付けていることや、その時々センター全体の課題と呼応させながら定例会のトピックを設定する必要もあるため、活動全体の情報を把握しているセンター側がフレーム設計する側面も強い。その際も、日々の活動の中で個々の SLA の声を拾いながら各部会の方向性を調整していく。つまり、「センター（員）」と「SLA」が協同で「部会活動」を創る関係構図を描いている。部会活動が SLA だけで行われるものではないことは、センター運営上の意図や課題と連動しているため本センターの特徴である。一方で、部会運営における SLA の自律性を高める動きは常に課題として捉え、改善を続けている。

（５）センタースタッフ構成（2015 年度時点）

センター長：関根勉（高度教養教育・学生支援機構 教授、放射化学）

副センター長：中川学（同 講師、日本近世史）

センター員：足立佳菜（同 助手、学習支援 [高等教育]・道德教育史）

センター員：鈴木学（同 助手、学習支援 [高等教育]・教師教育）

センター員：鈴木真衣（教育・学生支援部 教務課 全学教育実施係、事務補佐員）

SLA : 2015 年度前期 62 名、後期 55 名

▶2015 年度 S L A 体制

2015 年度の SLA は、前期は 62 名、後期は 55 名体制で運営した。ただし、このうち前期 9 名、後期 4 名については授業連携型支援での活動者であり、活動場所・形態を異にする。

昨年度卒業生が多かったこともあり、今年度はこれまでで最も多く新規採用を行った（新規採用 41 名、このうち 11 名は授業 SLA で半期採用）。

＜表 1-1. S L A 人数推移＞

	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
前期	21	38	37	36	46	62
後期	30	37	37	37	49	55

（単位：名）

■前期セメスター

全 62 名（途中採用・途中退職含む）。

○継続 34 名／新規 28 名（新規のうち 9 名はセメスター途中の採用）

○留学生数：8 名

＜表 1-2. SLA 所属別人数【'15 前期】＞

	文	教	経	理	工	農	国文	情報	合計
博士	3	1	1	13			1		19
修士 2	1			10		1			12
修士 1	1			10	1	2		1	15
4 年		1	2	7					10
3 年				2					2
2 年	2	1		1					4
合計	7	3	3	43	1	3	1	1	62

＜表 1-3. SLA 担当別人数【'15 前期】＞

	物理	数学	化学	ライティング	英会話	授業	合計
博士	5	4	3	5*		3*	20*
修士	9	5	2	1	6	4	27
学士	4	3	2		4	3	16
合計	18	12	7	6*	10	10	63*

*ライティングと授業 1 名兼任

■後期セメスター

全 55 名

○継続 44 名／新規 11 名

○留学生数：11 名

<表 1-4. SLA 所属・学年別人数【'15 後期】>

	文	教	経	理	工	農	国文	情報	合計
博士	2	1		11			1		15
修士 2	1		1	7					9
修士 1	1			8	1			1	11
4 年			1	8	1				10
3 年		1		5		1			7
2 年				2		1			3
合計	4	2	2	41	2	2	1	1	55

<表 1-5. SLA 担当別人数【'15 後期】>

	物理	数学	化学	ライティング	英会話	授業	合計
博士	5	3	3	3	1	1	16
修士	6	4	2	1	6	0	19
学士	8	3	2	1	3	3	20
合計	19	10	7	5	10	4	55

2. センター活動・実績報告

Summary

学習支援センターでは、窓口対応等により、物理、数学、化学、英会話、ライティングの5分野（セクション）の内容についての学習支援活動を行っている。分野により、①個別対応型学習支援、②企画発信型学習支援の比重が異なる。その他、自主ゼミ支援と授業連携型学習支援も行っている。

理系3科目（物理・数学・化学）の学習支援は、個別対応型学習支援の形態で支援を実施し、2015年度の利用者のべ数は、年間で2331人（前期1545人、後期786人）であった。昨年度と比較すると利用者数は減少したものの、過去5年間の平均値より高い利用者数となった。利用者数減の要因としては、昨年度利用が急増した「数学物理学演習」（工学部生必修）科目に関する利用者数減少の影響が大きい。一方で、年間を通して「解析学」科目に関する相談件数が増加した。本年度（主に前期 Semester）の特徴としては、①2年生利用割合の増加、②5回以上利用者の増加が挙げられる。昨年度利用者の一部が継続して今年度も利用しており、リピーターの増加傾向を示している。

理系科目支援の運営にあたり、「数学物理学演習」の統括をしている工学研究科工学教育院、全学教育の教員組織である化学委員会や「自然科学総合実験」と連携し、当該授業TAのSLA窓口への派遣や、利用状況情報のフィードバックを継続的に行った。

英会話支援としては、複数人で話すタイプの「英会話カフェ」とマンツーマンタイプの「1 on 1 英会話」の2種の活動を展開している。英会話の利用目的としては、過年度に比べ「留学」を目的に挙げる学生が多く、「何となく英会話を学びたい」「英語がとても苦手で何とかしたい」といったような利用者層が減少した印象であった。利用者総数としては、昨年度と比較するとやや減少したが、これはグローバルラーニングセンターのSAPとの連携のあり方を見直したためであり、通常の利用者数は増加している。この増加は、SLA体制の充実により、活動日数を拡大させたことの影響である。

ライティング支援については、SLAを増員し体制を強化した。個別対応型支援、企画発信型学習支援を行う他、コンサルシート発行による利用促進、一部予約制・限定書面对応の試行により利用者拡大を図った。結果、窓口の利用者は昨年度から大きく増加し、年間のべ75人、実数68名の利用があった（2014年度は26人、19名）。そのうち、コンサルシート活用授業の受講生の利用は72%であった。この取り組みにより利用者が増加したことは成果であったが、利用者の利用時期が局所的に集中してしまうという課題も浮き彫りになった。なお、ライティング支援の利用目的としては「レポート全般」に関する質問が最も多く、「レポートとは何か？」という漠然とした質問への対応が多いのが本年度の特徴である。各種の取り組みを通して、ライティング支援では、学生の自発的な学習ニーズを生むことの困難さを実感すると共に、授業との連携の重要性が確認された。

自主ゼミについては、今年度の登録は4ゼミ（名簿登録学生数105名）であった。登録ゼミは全て前年度以前から継続しており、2015年度に新規登録したゼミはなかった。全て理系学生のゼミである。

本年度の授業連携型学習支援の活動授業は、前期5授業・後期3授業であった。

1 理系科目支援（主に、物理・数学・化学）

理系3科目の学習支援は、物理・数学は平日2～5講時、化学は平日3～5講時に窓口を設置し、個別対応型学習支援の形態で支援を実施している（表2-1-1）。

2015年度の利用者のべ数は、年間2331人（前期1545人、後期786人）であった。大幅に増加した昨年度と比較すると利用者数は減少した（472人減）ものの、両セメスターとも過去2番目に多い数値であり、過去5年間の平均値より高い利用者数となった（表2-1-2）。また、前期セメスターについては、のべ数は前年度比91.8%であるが、対応件数は1319件で前年度比98.8%である。これは、前年度より1対応あたりの人数が減少した（＝複数人利用者が減った）ことを示している。そのため、利用者数過去最高となった昨年度と比べても、窓口稼働率はほぼ横這いであった。後期セメスターについては、延べ数・件数ともに前年度の7割ほどの利用となった。ただし実数は8割を超えているため、前年度より1人あたりの利用回数が減少したといえる。

利用者数減の要因としては、昨年度利用が急増した「数学物理学演習」（工学部生必修）の利用者数減少の影響が大きい。本授業の利用者数は昨年度比189人減となっており、減少数の約4割を占めている。ただし、本授業に限らず他の授業においても前年度比を下回るものが多かった（表2-1-10）。その中で、年間を通して、「解析学」の利用が増加したことは本年度の特徴である。

前期セメスターの特徴としては、①2年生利用割合の増加、②5回以上利用者の増加が挙げられる。①については、昨年度利用者の一部が継続して今年度も利用している様子が窺える。②については、リピーターの増加傾向を示している。

理系科目支援の運営にあたっては、昨年度に引き続き、「数学物理学演習」の統括をしている工学研究科工学教育院と連携し、当該授業のTAをSLAの窓口に派遣していただく体制を敷いた（週に2日各1名、約2時間）。また、全学教育の教員組織である化学委員会や「自然科学総合実験」に対し、利用状況情報のフィードバックを継続して行った。



<表2-1-1. 2015年度前期・後期SLA配置数（理系）>

前期セメスター	月			火			水			木			金		
	物	数	化	物	数	化	物	数	化	物	数	化	物	数	化
2講時	1	1		1	1		2	3		1	1		1	3	
昼休み	1	1		1	1		2	3		1	1		1	2	
3講時	3	1	1	2	1	1	3	2		2	1	1	1	1	2
4講時	4	1	1	3	1	1	3	2		3	1	1	2	3	2
5講時	4	2	1	3	2	1	3	2		3	1	1	2	4	2

後期セメスター	月			火			水			木			金		
	物	数	化	物	数	化	物	数	化	物	数	化	物	数	化
2講時				1	1		4	1		2	1		3	1	
昼休み	1	1		1	1		4	1		2	1		3	1	
3講時	1	4		2	1	1	2	1		2	1	1	2	1	2
4講時	1	4	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	2
5講時	1	4	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	2

■□ 詳細 □■

①利用者数

のべ 2331 人の利用者で前年度比 83.2%であったが、利用者実数は 517 名で前年度比 88.7%、対応件数は 2015 件で前年度比 87.7%である。月別の傾向では、4 月・8 月利用者の増加が特徴である。

<表 2-1-2. 2010～2015 年度の理系支援利用者のべ数変遷>

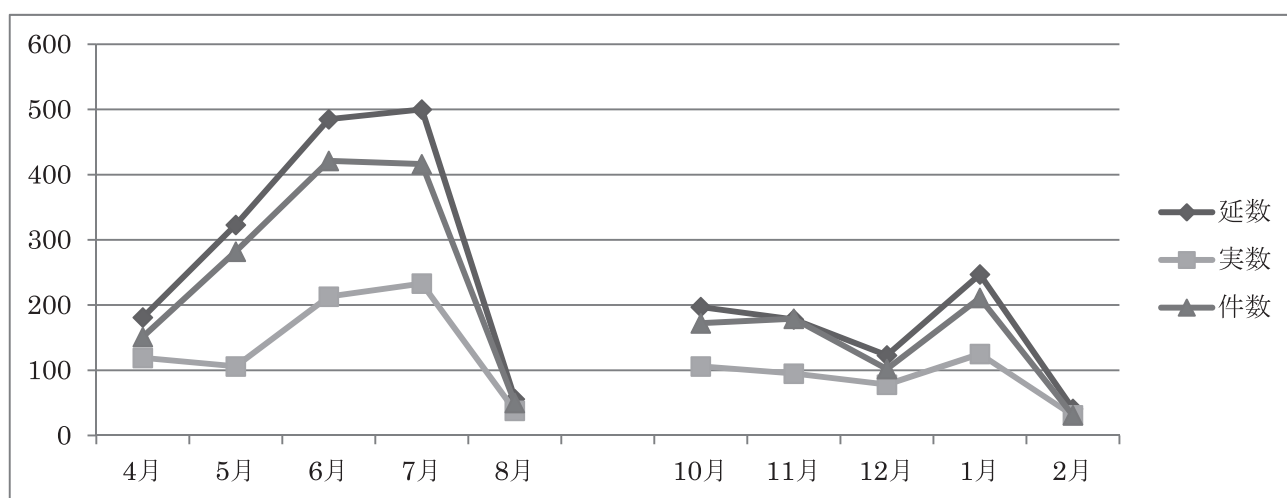
	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
前期	85	901	1,125	916	1,682	1,545
後期	304	433	761	421	1,121	786
合計	389	1,334	1,886	1,337	2,803	2,331

(単位:人)

<表 2-1-3. 月別理系支援利用者数【理'15】>

	日数	対前年度差	延数(人)	対前年度比	実数(名)	対前年度比	件数(件)	対前年度比
4月	11	-1	181	114.6%	119	120.2%	151	125.8%
5月	18	-2	323	75.1%	106	89.8%	282	77.5%
6月	19	-2	485	97.8%	213	88.8%	421	110.8%
7月	22	0	500	84.3%	233	82.9%	416	89.3%
8月	5	3	56	1120.0%	38	760.0%	50	1000.0%
10月	18	0	197	63.5%	106	77.4%	172	65.9%
11月	19	1	178	59.1%	95	75.4%	179	70.8%
12月	18	1	123	80.4%	78	98.7%	102	75.0%
1月	18	0	247	87.3%	125	87.4%	211	83.7%
2月	5	-1	41	56.2%	31	58.5%	31	50.8%
合計	153	-1	2,331	83.2%	517※1	88.7%	2015	87.7%

※1 実数合計は、月別合計の累計数ではなく、年間の実数を表す。



<図 2-1-1. 月別理系支援利用者数推移【理'15】>

②科目別利用傾向

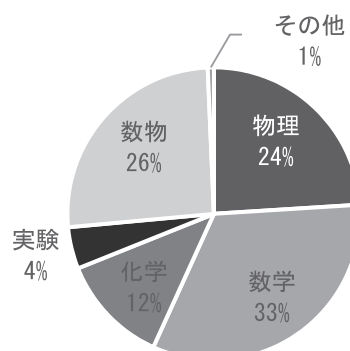
科目別の利用傾向は、数学＞物理＞化学の順であり、これは例年の傾向と相違はない。

※「数学物理学演習」を「数物」と表記している。

＜表 2-1-4. 科目別利用件数【理'15】＞

物理	489
数学	668
化学	247
実験	94
数物	525
その他	14

単位：件



＜図 2-1-2. 科目別利用割合【理'15】＞

③目的別利用傾向

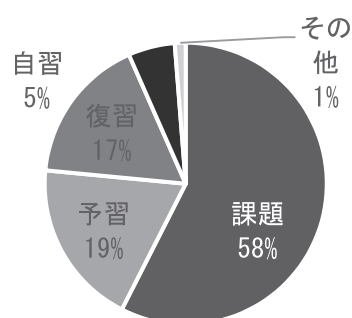
傾向は例年通りであるが、今年度は課題での利用割合がわずかに増えた。

＜表 2-1-5. 目的別利用件数【理'15】＞

課題	1055
予習	349
復習	310
自習	98
その他	23

単位：件

※未回答を除く



＜図 2-1-3. 目的別利用割合【理'15】＞

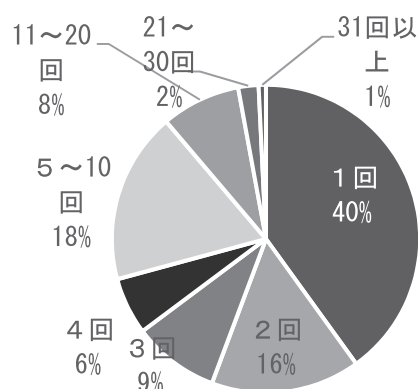
④利用回数別利用者数

例年通り、1、2回利用する学生と、何度も利用する学生に分かれている。

＜表 2-1-6. 利用回数別人数（実数）【理'15】＞

利用回数	人数
1回	207
2回	81
3回	47
4回	31
5～10回	93
11～20回	43
21～30回	11
31回以上	4

単位：人



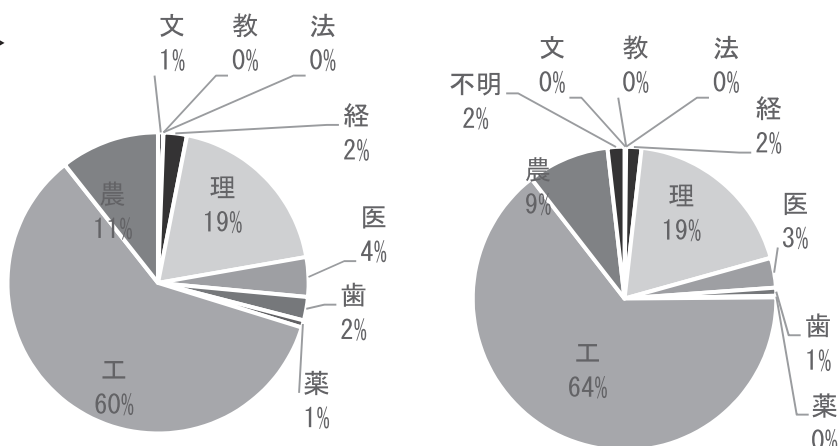
＜図 2-1-4. 利用回数別利用割合【理'15】＞

⑤学部別利用者数

実数・延べ数ともに、工学部生が6割を占めている。

＜表 2-1-7. 学部別利用者数【理'15】＞

学部	実数(名)	延数(人)
文	3	4
教	0	0
法	0	0
経	13	38
理	99	440
医	22	74
歯	13	20
薬	4	4
工	308	1,506
農	55	203
不明	—	42
合計	517	2,331



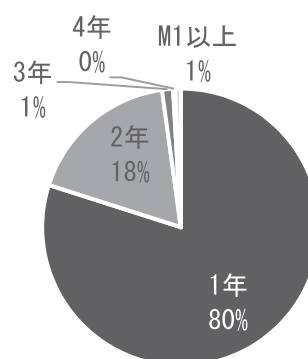
＜図 2-1-5. 学部別利用割合（左：実数、右：のべ数）【理'15】＞

⑥学年別利用者数

今年度は、1年生の利用者数が減少したが、2年生の利用者数が増加した。

＜表 2-1-8. 学年別利用者数（のべ数）【理'15】＞

学年	人数
1年	1,863
2年	417
3年	30
4年	6
M1生以上	15
合計	2,331



＜図 2-1-6. 学年別利用割合（のべ数）【理'15】＞

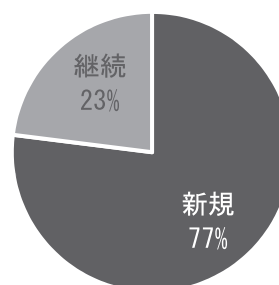
⑦新規・継続別利用者数

新規利用者は減少したが、継続利用者が増加し、昨年度の2倍となった。

＜表 2-1-9. 新規・継続利用者数（実数）【理'15】＞

	2014年度	2015年度
新規利用者	527	398
継続利用者	56	119

※「新規利用者」＝2015年度初めて利用した学生、「継続利用者」＝前年度以前も利用したことがある学生



＜図 2-1-7. 新規・継続利用者割合（実数）【理'15】＞

⑧授業別利用者数

利用者数が多い上位 7 授業は、順位の変動はあるものの、例年と変わらない結果であった。昨年度急増した工学部対象授業「数学物理学演習」に関する質問が今年は減少したが、他授業の全体的な傾向としても前年度より利用者数は下回っている。

本年度は 1 年生の利用者が減少したため、上位 7 授業（1 年生対象）の利用者の延べ数は概ね減少している。一方、2 年生の利用者が増加したため、それ以外の授業利用者が増加した。利用が多かった 2 年生向けの授業は、①数理統計学（+21 人）、②解析学 C（+39 人）、③物理化学（+11 人）、④代数学序論 A（+29 人）である。

＜表 2-1-10. 2014 年度・2015 年度上位 7 授業別利用者のべ数比較＞

A.前期セメスター

授業名	2014	2015	前年度比
数学物理学演習 I	413 人	379 人	91.8%
化学 A	239 人	163 人	68.2%
解析学 A	122 人	133 人	109.0%
物理学 A	152 人	134 人	88.2%
物理学 D	99 人	99 人	100.0%
自然科学総合実験	88 人	73 人	83.0%
線形代数学 A	122 人	75 人	61.5%

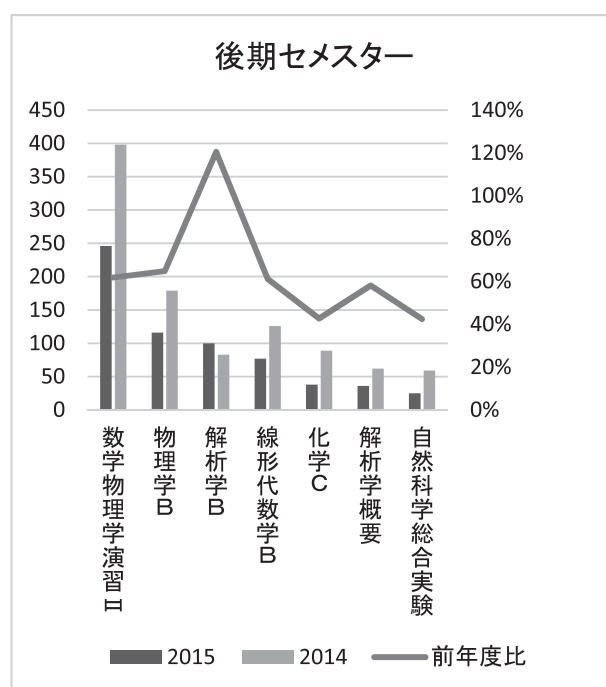
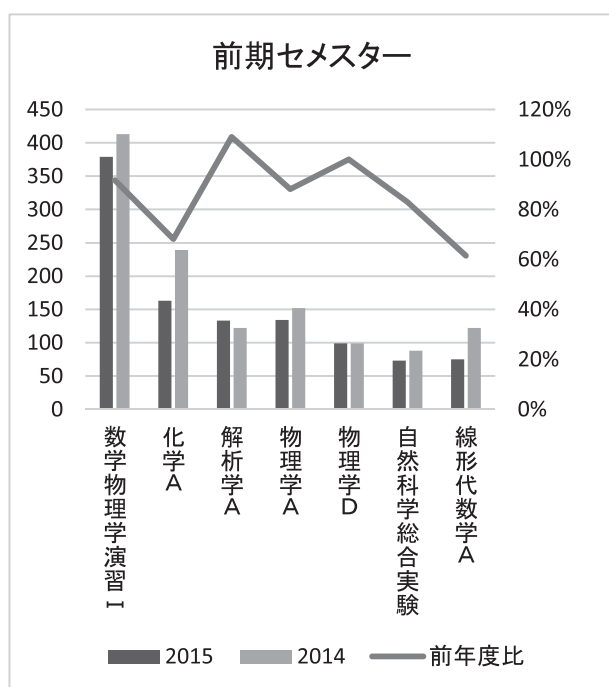
利用者数合計	1,682 人	1,545 人	91.9%
--------	---------	---------	-------

B.後期セメスター

授業名	2014	2015	前年度比
数学物理学演習 II	398 人	246 人	61.8%
物理学 B	179 人	116 人	64.8%
解析学 B	126 人	100 人	120.5%
線形代数学 B	89 人	77 人	61.1%
化学 C	83 人	38 人	42.7%
解析学概要	62 人	36 人	58.1%
自然科学総合実験	59 人	19 人	42.4%

利用者数合計	1,121 人	786 人	70.1%
--------	---------	-------	-------

（「利用者数合計」はその他の質問を含むセメスター全体の合計数である。前年度比率の比較のために掲載した。）



2 英会話支援

英会話支援では、複数人で話すタイプの「英会話カフェ」（以下、「カフェ」とする。）とマンツーマンタイプの「1 on 1 英会話」（以下、「1on1」とする。）の2種の活動を展開している。英会話については、担当する SLA 学生の時間割を鑑みながらセメスターごとに活動時間を決定している。2015 年度の活動日は下表のとおりである。

利用者数としては、昨年度と比較すると約 50 名減であった。2014 年度は、グローバルラーニングセンターの SAP との連携（SAP 参加者の SLA 選択必須利用）があったために利用者数が急増したことで運営上の課題が生じた。そこで本年度は、SAP 参加者の SLA 利用は“推奨利用”としていただいた結果、当該目的の利用者が減少した。その中での数値となるため、通常の利用者数としては増加していると見ることができる。この増加の背景には、SLA 体制の充実により、活動日数を拡大させたことの影響がある。

英会話の利用目的としては、印象評価であるが、過年度に比べ「留学」を目的に挙げる学生が多く、「何となく英会話を学びたい」「英語がとても苦手で何とかしたい」といったような利用者層が減少しているように感じている。今後、SLA 英会話の提供するサポート内容・体制としてどのような特徴を見い出していくかが課題である。



＜表 2-2-1. 2015 年度前期・後期 SLA 配置数（英会話）＞

前期	月		火		水		木		金	
	カフェ	1on1	カフェ	1on1	カフェ	1on1	カフェ	1on1	カフェ	1on1
2 講時										
昼休み	2						2		2	
3 講時	2						2		2	
4 講時	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5 講時	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

後期	月		火		水		木		金	
	カフェ	1on1	カフェ	1on1	カフェ	1on1	カフェ	1on1	カフェ	1on1
2 講時										
昼休み		予約		予約				予約		予約
3 講時		予約		予約				予約		予約
4 講時	2		2		2		2		2	
5 講時	2		2		2		2		2	

■□ 詳細 □■

① 利用者数

利用者数は過去2番目に多い651人であった。利用形態別にみると、「カフェ」利用が453人、「lon1」利用が198人である。

<表 2-2-2. 2010～2015 年度の英会話支援利用者のべ数変遷>

	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
前期	(7)	215	100	203	238	427
後期	(22)	183	61	133	460	224
合計	(29)	398	161	336	698	651

※2010 年度は別形態だったため、参考値（単位：人）

<表 2-2-3. 2015 年度英会話支援利用者数>

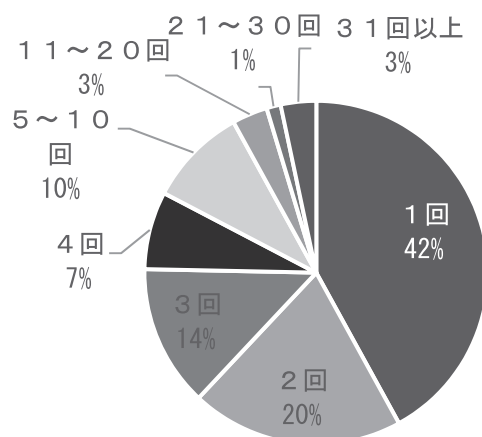
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	前期計	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	後期計	合計
開催回数	17	40	51	40	4	152	27	31	33	30	6	127	279
利用者数	58	142	137	88	2	427	41	49	73	47	14	224	651
(カフェ)	36	112	108	59	0	315	22	35	47	24	10	138	453
(lon1)	22	30	29	29	2	112	19	14	26	23	4	86	198

② 利用回数別利用者数

利用回数は、例年通り3回までの利用者が7割以上を占めるが、今年度は31回以上利用した学生が微増した。

<表 2-2-4. 利用回数別人数【英'15】>

利用回数	人数
1回	63
2回	30
3回	20
4回	11
5～10回	14
11～20回	5
21～30回	2
31回以上	5



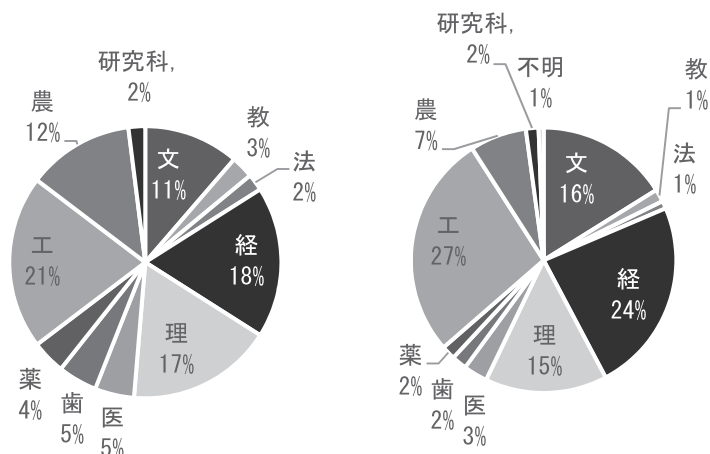
<図 2-2-1. 利用回数別割合【英'15】>

③ 学部別利用者数

英会話利用者の学部割合は比較的変動が大きい。今年度は文・経・理・工学部の利用が多かった。

＜表 2-2-5. 学部別利用者数【英'15】＞

学部	実数(名)	延数(人)
文	17	105
教	4	10
法	3	6
経	27	154
理	26	97
医	7	19
歯	7	12
薬	6	11
工	31	178
農	19	45
研究科	3	10
不明	—	4
合計	150	651



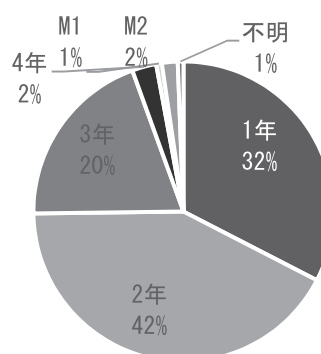
＜図 2-2-2. 学部別利用割合（左：実数、右：のべ数）【英'15】＞

④ 学年別利用者数

1年生の利用は減少したが、2・3年生の利用が増加した。

＜表 2-2-6. 学年別利用者数（のべ数）【英'15】＞

学年	人数
1年	212
2年	275
3年	128
4年	17
M1	4
M2	11
不明	4
合計	651



＜図 2-2-3. 学年別利用者数（のべ数）【英'15】＞

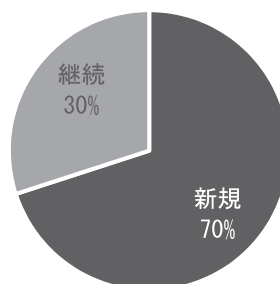
⑤ 新規・継続別利用者数

新規利用者は減少した（－69名）が、継続利用者が増加した（＋23名）。

＜表 2-2-7. 新規・継続利用者数（実数）【英'15】＞

新規利用者	105
継続利用者	45

※「新規利用者」＝2015年度初めて利用した学生、「継続利用者」＝前年度以前も利用したことがある学生



＜図 2-2-4. 新規・継続利用者割合（実数）【英'15】＞

3 ライティング支援

2015年度は、ライティング支援の強化を図るため、SLAを4名増員し計6人体制で活動を開始し、各種支援形態を開発した年度であった。支援形態・運営方法として、次のような取り組みを行った。

- ① 窓口対応（個別対応型学習支援） ② コンサルティングシート発行による利用促進
③ イベント開催（企画発信型学習支援） ④ 一部予約制・限定書面对応の試行

①について、前期・後期各セメスターの窓口設置体制は＜表 2-3-1＞の通りである。窓口の利用者は、昨年度と比較すると大きく増加し、年間のべ75人、実数68名の利用があった（2014年度は26人、19名）。これは②のコンサルティングシート活用授業による利用促進の効果も大きい（詳細 p.31）。75人の利用者のうち、シート活用授業の受講生の利用は72%であった。この取り組みにより利用者が増加したことは成果であったが、運営上は、利用者の利用時期が局所的に集中してしまうことが課題として浮き彫りになった。特に、レポートの〆切日はどの授業も似通ってくるため、「レポート執筆後」の利用が多いとこの傾向に拍車がかかる。窓口の開き方を含め、運営の工夫を図っていきたい。なお、ライティング支援の利用目的としては「レポート全般」に関する質問が最も多く（表 2-3-5）、「レポートとは何か？」という漠然とした質問への対応が多いのが本年度の特徴であった。

③については、附属図書館参考調査係との連携により、附属図書館で開催する形で実施した。イベントは全5回の開催で、コンテンツは下表の通りである。常時学生の利用者が多い附属図書館で開催することで利用者数の増加を期待したが、その点についてはあまり良い結果は得られなかった。次年度は、開催時期を早め、新1年生に向けたイベントを企画したい。

④については、①の窓口利用促進のために、後期セメスター中に試行した利用方法である。大学生協にご協力いただき、案内（付録 D-14）を食堂に配置したが、利用者はいなかった。

全体を通して、ライティング支援においては、学生の自発的ニーズを生むことの困難さを各種取り組みを通して実感する年度となった。ライティング支援においては授業とのリンクが不可欠であると感じているが、その具体的な方法やより建設的な支援のあり方に向けて、引き続き検討していきたい。

＜表 2-3-1. 2015 年度前期・後期 SLA 配置数（ライティング）＞

前期	月	火	水	木	金	後期	月	火	水	木	金
2 講時	1				1	2 講時					
昼休み	1				1	昼休み		1			
3 講時	2	1	1	1	2	3 講時		1			
4 講時	1	1	1	2	1	4 講時	1		1	1	1
5 講時	1	1	1	2	1	5 講時	1		1	1	1

※後期セメスターは1月3週目より窓口設置

＜表 2-3-2. ライティングセミナー開催イベント一覧＞

11/16(月)	12:15～12:45、13:00～13:30	第1回：レポートって何だろう？
11/26(木)	12:15～12:45、13:00～13:30	第2回：レポートの構成
11/30(月)	12:15～12:45、13:00～13:30	第3回：本の読み方・付き合い方
12/8(火)	12:15～12:45、13:00～13:30	第4回：理系学生向け・文系レポート作成のアドバイス
12/15(火)	12:15～12:45、13:00～13:30	第5回：脱レポート－発書き

① 窓口利用者数

今年度は連携授業における利用促進策の効果もあり、利用者数は前年度より増加した。

＜表 2-3-3. ライティング支援窓口利用者数＞

	延数(人) a	対前年度	受付日数(日) b	1日当たり数 a/b	実数(名)
4月	4	+1	11	0.4	4
5月	17	+16	18	0.9	16
6月	12	+2	21	0.6	11
7月	19	+11	21	0.9	7
8月	2	(close)	4	0.5	1
10月	0	±0	2	-	0
11月	1(9)※1	±(1	1.0	1
12月	0(8)※1	-1	0	-	0
1月	20	+19	12	1.7	20
2月	0	-1	3	-	0
合計	68(17)※1	26	93	(平均)0.7	75※2

※1 表中()内の数字は、セミナー参加者。

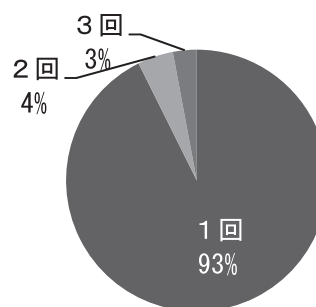
※2 セメスターを通しての合計実数であり、月間の単純合計ではない。

② 利用回数別利用者数（窓口）

ほとんどの利用が1回のみの利用であった。ㄨ切近くに利用する事例も多かったことが影響していると考えられる。

＜表 2-3-4. 利用回数別人数【ラ'15】＞

利用回数	人数
1回	63
2回	3
3回	2



＜図 2-3-1. 利用回数別割合【ラ'15】＞

③ 利用目的

学生自身のニーズとしては、レポート全般に関する質問が多かった。

＜表 2-3-5. 利用目的別延べ人数【ラ'15】＞

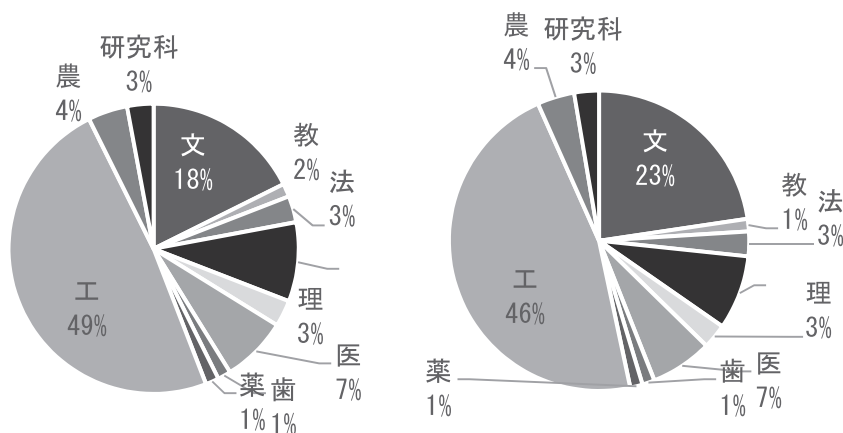
利用目的	レポート 全般	問い・ テーマ	文章表現	形式・ ルール	構成・ 章立て	文献・ 資料検索	P C の 使い方
人数	11	7	7	4	3	1	1

④ 学部別利用者数

利用者の所属は、工学部が約半数を占めている。

＜表 2-3-6. 学部別利用者数【ラ'15】＞

学部	実数(名)	延数(人)
文	12	17
教	1	1
法	2	2
経	6	6
理	2	2
医	5	5
歯	1	1
薬	1	1
工	33	35
農	3	3
研究科	2	2
合計	68	75



＜図 2-3-2. 学部別利用割合（左：実数、右：のべ数）【ラ'15】＞

⑤ セミナー利用者数

セミナー利用者は各回ともにわずかであった。

＜表 2-3-7. ライティングセミナー利用者数【ラ'15】＞

月日	セミナー内容	参加者数（人）
11/16(月)	第1回：レポートって何だろう？	2
11/26(木)	第2回：レポートの構成	4
11/30(月)	第3回：本の読み方・付き合い方	3
12/8(火)	第4回：理系学生向け・文系レポート作成のアドバイス	3
12/15(火)	第5回：脱レポート一発書き	5

⑥ コンサルティングシートの発行と活用授業

授業での活用の仕方は任意であるが、希望のあった授業に紐づく質問の場合、SLAの窓口利用を証明するシートを学生に対し発行するという取り組みを2015年度前期より試行した。センターとしての目的は窓口の利用促進が主ではあるが、広くは、学生の学習の中心である授業と課外学習をつなぐ装置として、センターが授業担当者に向けて行うサービスとして位置づけている。

本年度は、本取り組みを、高度教養教育・学生支援機構の教員を対象に広報を行った。結果、応募があったのは下記の授業であった。

＜表 2-3-8. 2015年度ライティング窓口コンサルティングシート活用授業＞

	教員	対象授業	提出時期	形態
前期	関内隆	歴史と人間社会「近代イギリス経済の形成とスペイン・オランダ」	学期内	推奨
前期	中川学	基礎ゼミ「フィールドワークの日本史」	期末	必須
後期	中川学	人間と文化「東北大学を学ぶ」	期末	必須


(参考)

コンサルティングシートについて

(サンプル)

SLA ライティング コンサルティング シート	
対応日時	2016年 月 日 () 時間 : ~ :
学生氏名	利用回数 初めて ・ 2回以上
担当SLA	
執筆段階	<input type="checkbox"/> 執筆前 <input type="checkbox"/> 執筆途中 <input type="checkbox"/> 執筆後
対応内容	<input type="checkbox"/> 1. レポート全般 <input type="checkbox"/> 2. 問い・テーマ設定 <input type="checkbox"/> 3. 文章表現 <input type="checkbox"/> 4. 形式・ルール <input type="checkbox"/> 5. 構成・章立て <input type="checkbox"/> 6. 文献・資料検索 <input type="checkbox"/> 7. PCの使い方 <input type="checkbox"/> 8. その他 ()
概要	

本学生は、SLAサポート(ライティング)を活用し、レポートの改善・向上に取り組んだことを証明します。
東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター(SLAサポート)



- 質問対応の終了時に、学生さんに手渡しします。
- B7サイズの小さなカードです。
- 先生からのシート発行の申請がない通常の利用者には、本シートは発行していません。

■コンサルティングシート発行に当たっての注意事項

a. 当該授業の受講生であるかの照合 (= コンサルシートの発行が必要か否かの判断) は、学生が窓口利用時に記入する「利用記録用紙」への記載によって判断します (レポート課題の質問の場合、記録用紙に「授業名」を記載する箇所があります)。そのため、学生自身の記載漏れがあった場合は、シートの発行が行き届かない可能性がありますのでご注意ください。

(※その他の対応が必要な場合は、別途ご相談ください)

b. シート発行「後」の取り扱いについては、先生方にご一任いたします。センターから学生の方に指示は致しませんので、あらかじめご了解ください。

■その他ご案内 <<SLAにおけるレポート課題の事前把握について>>

先生が受講生に提示している「レポート課題文」および「書式等の指示文」を事前にセンターにお送りいただければ、実際に対応にあたるSLAにもこれを周知し、対応に活かさせていただきます。先生方の課題文や意図をお知らせいただくと、対応の方向性を定めやすくなります。また、独自の課題設定をしている場合は、ミスリードを防ぐことができます。

ただしその場合も、SLAは先生のご趣旨を完全に理解できるわけではありませので、対応はあくまで一般的な対応となります。利用学生にもその旨、利用上の注意点として案内いたします。

上記の趣旨にご理解いただける場合は、ぜひ【課題の事前把握】についてもお申し付けください。

4 自主ゼミ支援

2015年度の登録自主ゼミは、4ゼミ（名簿登録学生数105名）であった。登録ゼミは全て前年度以前から継続しており、2015年度に新規登録したゼミはなかった。登録ゼミの詳細は表2-4-1の通りであり、全て理系学生のゼミである。

自主ゼミの活動は様々である。青星塾は参加者が各自テーマを決め、発表を順にしていく活動をしている。金ゼミは、上級生による下級生への講義、担当者ごとの発表、工場見学、学年末発表等をしている。FTEは、技術向上のための勉強会や設計等のミーティングを行っている。電ゼミは、電子工学や情報工学等の発表・輪読をしている。

センターで行っている支援内容としては、放課後教室貸出とSLAラウンジ利用時の備品貸出を中心とする、環境バックアップ支援がメインである。自主的な学習活動を支える上で、活動場所の提供は重要なサポートの一つである。しかし、大学内のラーニング・コモンズの発展（附属図書館の改築）に伴い、相対的に環境支援のニーズは減少してくるものと思われる。その中で、「自主ゼミ活動を生む」支援をより充実させていくことが、本センターの今度の課題である。

■□ 詳細 □■

① 登録自主ゼミ一覧

今年度は理系学生のゼミのみとなった。

＜表 2-4-1. 2015 年度登録自主ゼミ＞

ゼミ名	母体	内容	主要学年	人数※	継続/新規	支援時期
青星塾	理学部生物学科	勉強会（生物）	1～2年	7	継続	前期・後期
金ゼミ	工学部（材料系）	勉強会（材料系）	1～3年	17	継続	前期・後期
FTE	主に、工・理	ロケット製作	1～2年	77	継続	前期・後期
電ゼミ	工学部（電子工学系）	勉強会（電子工学系）	2～3年	4	継続	前期・後期

※「人数」は名簿登録人数であり、実際の活動人数は異なる場合もある。

② 教室貸出し回数

	4月	5月	6月	7月	10月	11月	12月	1月
回数	2	10	10	1	7	8	3	2

授業連携型学習支援は、他の SLA の活動形態とは異なり、授業専属の活動を行う支援形態である。TA と異なる点は、①学部生も雇用可能であること、②雇用・勤務管理を学習支援センターが行うこと、③雇用方法に柔軟性があること（短期の活動も可など）、④教員の事務補助（だけ）ではなく、“よき先輩”として受講生の学びを支援する役割を担うことである。特に SLA の理念としては④の点を重視している。先輩学生の力を活用して授業を活性化させたい教員向けに開かれている応募型の支援形態であり、近年は「基礎ゼミ」を中心に活動授業を募集している。

本年度の活動授業は、前期 5 授業・後期 3 授業であった。応募により 2015 年度活動を行った授業は、下表 A～D、F である。このうち、教員からレポートを提出いただいた物について、次ページ以降掲載する。

E・G・F の授業については、本センターと他機関との連携により実施した取り組みである。E の附属図書館の授業は、ライティング支援強化促進の一環として、双方のライティング支援の取り組みの情報共有も目的の一つとして行った活動であった。G・F は、グローバルラーニングセンターとの連携により、授業連携型学習支援の在り方と留学生向けの支援の在り方を模索するために、本年度新たに行った活動である。本活動は、複数授業の受講生（主に留学生）を対象に、SLA が授業外で質問を受け付ける形態で支援を行った。ただし、当初の想定よりも利用率が芳しくなく、その背景には、担当する SLA 側・受講生側どちらの留学生も空き時間が少ないことによる運営上の困難さがあった。窓口の開き方などを見直すとともに、当初想定されていたニーズについても再検討し、次年度も活動の改善を図る予定である。

<表 2-5-1. 2015 年度連携授業>

		科目	授業名	教員 (所属)	継続/ 新規	活動 範囲	SLA
A)	前期	基礎ゼミ	西洋近代史への誘い	関内隆 (高)	継続 (4 年)	内・外	1 名(D3) ※継続
B)	前期	基礎ゼミ	電子と光を使って極微の世界を体験する	村松憲仁、他 (電子光理学研)	新規	内	2 名(M1、M2)
C)	前期	基礎ゼミ	今だからこそ学ぼう『安全・安心でおいしい食品づくりの取り組み』	仲川清隆 (農)	新規	内	1 名(M1)
D)	前期	基幹科目	言語表現の世界／社会科学レポート作成法	沼崎一郎 (文)	継続 (3 年)	外	3 名(B2) ※元受講生
E)	前期	展開科目	大学生のレポート作成入門—情報探索から執筆まで—	附属図書館 参考調査係	継続 (2 年)	内・外	1 名(D1)
F)	後期	展開ゼミ	西洋近代史への誘い	関内隆 (高)	継続 (2 年)	内・外	1 名(D3) ※継続
G)	後期	展開科目	•Foundations of Linear Algebra •Foundations of calculus •Calculus C •Probability and statistics	Frank Hansen (高)	新規	外	1 名(B3)
H)	後期	展開科目	•Biology A •Life and Nature	Martin Robert (高)	新規	外	2 名(B2)

※「活動範囲」における「内・外」は、受講生を対象とした授業内活動、授業外活動の有無を示す。
ここでいう活動には“準備活動”は含まない。

授業 A) 教員リフレクションレポート

高度教養教育・学生支援機構 関内 隆

1. 先生の授業に授業 SLA（先輩学生）を活用することで、どのような意義・課題がありましたか？①受講生の学生にとって、②先生にとって、③授業 SLA として活動した学生にとってという視点で自己評価をお願いします。

授業 SLA の活動として、授業時間内での活動と授業時間外での活動があげられる。前者は TA とほぼ同じ役割を果たしたが、授業時間外の活動にとって不可欠であることから授業にも参加してもらった。授業時間内活動では、受講生の中間発表や最終発表に対するコメントを行うとともに、受講生がミニットペーパーに発表学生への感想・意見等を書き記した内容を取りまとめて、次回にフィードバックする役割を果たした。

授業時間外の活動は下記の 3 つのタイプに分けられ、(1) を基本として、時間的な余裕が出た場合に他の 2 項目を実施した。

(1) SLA アワー

中間発表や最終発表に向けて受講生に対して個別のコンサルティングを実施した。

(2) レポート作成に向けたワークショップ

発表や最終レポートの作成に向けて、レジュメを作成する手順、目次や年表を作成する意義を確認するためのワークショップを実施した。

(3) レポート検討会

最終レポートの提出前にレポート草案を持ち寄り、受講生お互いがそれらを読み合わせて意見交換をする場を主宰した。

受講生にとって、年齢が近く親しみやすい先輩学生からの個別コンサルティングは大変有益であったと考える。授業評価アンケート等においてもその反響は見取れる。また、ワークショップ、レポート検討会にとっても、意欲のある学生にとって大いに有意義な企画であった。他方、レポート検討会は受講生にとって若干負担過重で、希望者のみとして対応した。

教員にとっては、SLA が受講生の授業時間外学習を推進していく導き役を果たしてくれたとの思いが強い。近年、アクティブ・ラーニングが叫ばれているが、学生の主体的な姿勢を刺激する一つの方法として身近な先輩学生の役割は大きいと思う。教員は一般に 20 歳前後の学生の若者カルチャーや物事の見え方、感じ方の把握に疎い傾向にあり、その点で SLA 先輩学生の強みがあるからである。

さらに、授業 SLA を担当した学生にとっても、TA が果たす役割以上に学習指導にコミットする機会を得ることによって、教育トレーニングの幅を広げるチャンスになったと思われる。

なお、SLA を活用して濃密な授業外学習を促すための障害として、学生が多くの科目を履修しており時間をそれほど割けないという現実があり、過密な科目履修傾向などが課題としてあげられる。

2. 先生の実践をもとに、「授業 SLA（先輩学生）を授業に活用する Tips（コツ）」を 5～10 個挙げるとすると、どのようなものが考えられますか？先生の知見をご提供いただければ幸いです。

- 授業外の学習成果を授業時間で発表するというゼミ本来の仕組みを作る
- 先輩学生に相談すれば教員とは違うアドバイスが得られるとの雰囲気を作る
- 授業 SLA は必ず授業に参加し、教員が掲げる学習目標を理解するよう努める
- 教員は受講生の雰囲気や授業に向かう姿勢等の情報を SLA から可能な限り獲得する
- 教員ではなく先輩学生が行った方が受講生にとって良いと思うものは SLA に任せる

3. その他、学習支援センターへのご意見、ご要望、ご提案等ありましたらお聞かせください。

授業C) 教員リフレクションレポート

農学研究科 仲川清隆

2

センター活動・実績報告【授業連携型学習支援】

1. 先生の授業に授業 SLA（先輩学生）を活用することで、どのような意義・課題がありましたか？①受講生の学生にとって、②先生にとって、③授業 SLA として活動した学生にとってという視点で自己評価をお願いします。

私たちの毎日の暮らしに『食』は欠かせない。故に、食品の安全性の確保は私たちの健康を守るために極めて重要であり、食の安全・安心への関心は急速に高まってきている。食品の安全性の確保に向けては、最新の科学的知見に基づきながら、消費者や生産者、食品関係事業者など幅広い関係者と情報を共有しつつ、安全・安心でおいしい食品づくりがなされることが望まれている。そこで本基礎ゼミでは、フィールドワーク（青葉化成株式会社の工場・研究所の見学および講義）を通じて、受講学生が、安全・安心でおいしい食品づくりについての最新の取り組みを学ぶことを目的とした。

フィールドワーク当日は、実際の食品製造工場・研究所を見学しながら、とくに、「安全とは、安心とは」、「工場が目標とする品質」、「食品異物トラブルの例」、「安全な食品」、「食品の安全上問題となっているもの」、「異物の混入を防ぐために」、「製造工程で異物を除去する」、「化学物質の取り扱い」、「食中毒の防止」などを学んだ。受講学生は、安全・安心でおいしい食品づくりの取り組みを肌で学び、科学的知見に基づいて食品の安全性に関して議論ができるようになったと感じられた。なお、SLA 学生とともに工場・研究所をとまわること、受講学生の緊張感がほぐれ、とても良い雰囲気でのフィールドワークを行うことができた。

次いで、フィールドワークの感想や気づいたことを受講学生にパワーポイントにまとめてもらい、発表会を行った。発表内容から、受講学生が非常に興味を持ってフィールドワークに臨んだことが伝わってきた。発表後に、教員や SLA 学生から質問をすることで、受講学生の考える機会を増やすことができ、議論を通じて、安全・安心でおいしい食品づくりについての理解がさらに深まったと感じられた。

以上より、本基礎ゼミの目的（安全・安心でおいしい食品づくりについての最新の取り組みを学ぶ）を達成したと考えられる。

2. 先生の実践をもとに、「授業 SLA（先輩学生）を授業に活用する Tips（コツ）」を 5～10 個挙げるとすると、どのようなものが考えられますか？先生の知見をご提供いただければ幸いです。

- 受講学生と SLA 学生のコミュニケーションの場を十分に与えることで、教育効果が上がるように感じられた。
- Tips というわけではないが、フィールドワークでは受講学生がはぐれないようにする等幾つか注意する必要があるものの、やはり教員一人では難しい面が有り、この点で SLA 学生のサポートは非常に役立った。

3. その他、学習支援センターへのご意見、ご要望、ご提案等ありましたらお聞かせください。

本授業に SLA 学生をあてていただき、ありがとうございました。感謝申し上げます。

授業D) 教員リフレクションレポート

文学部／研究科 沼崎 一郎

1. 先生の授業に授業 SLA（先輩学生）を活用することで、どのような意義・課題がありましたか？①受講生の学生にとって、②先生にとって、③授業 SLA として活動した学生にとってという視点で自己評価をお願いします。

①前年度 AA 取得者が SLA となっているので、見事にレポートを完成させた先輩から、体験に基づく具体的なアドバイスが得られる。また、SLA がロールモデルとして、「やればできる見本」となっている。特に、一年生の一学期の授業であるため、受講生は不安いっぱいなので、経験者のアドバイスを受けることができるというのは、非常に重要。「本当にやればできるのだ」と実感できる。また、最初は不安であたりまえだということも、実際の経験者から聞くと安心感が生まれる。

②受講生の目線で、私の指導の足りない部分を補ってもらえる。私とは違い、同年代で「文化」を共有しているので、教師の通訳にもなってもらえる。

③「教える」という体験を通して、教師の要求を改めて理解できたのではないかと思います。日常の連携をもう少しとったほうがよかった。特に、来談者が少なかった際に、もっと SLA を訪ねさせる「しかけ」を作るべきだった。教師と SLA の分業体制の構築を改めて考えたい。

2. 先生の実践をもとに、「授業 SLA（先輩学生）を授業に活用する Tips（コツ）」を 5～10 個挙げるとすると、どのようなものが考えられますか？先生の知見をご提供いただければ幸いです。

様々なクラウド・サービスの活用（授業時間外の添削指導に教員と SLA が共に参加）
SNS 等を使った授業時間外のコミュニケーションの充実
先輩から後輩への具体的な体験の共有（失敗談、不安解消法などの伝授）
先輩による教員の「キャラ」の説明と、その対処法の後輩への伝授
SLA の役割の明確化（学生が求めてよいことと、よくないことの区別をハッキリ）
SLA と学生を結びつける「しかけ」づくり

3. その他、学習支援センターへのご意見、ご要望、ご提案等ありましたらお聞かせください。

●図書館が推進しているラーニングコモンズとの連携を考えてはどうか？

具体的なアイデアが特にあるわけではないが、大昔はサークルや読書会がラーニングコモンズになって、そこで先輩学生が事実上の SLA として後輩の面倒を見ていた。ところが、読書会は激減し、サークルも弱体化しており、学生同士の「教え合い、学び合い」の場がなくなっているように思う。学生の気質も変わってきていて、友達づくりに慎重で、「教えてくれる先輩」を自分自身で見つけようというのは不得手のようだ。

そこで、様々な学生同士を、学年を超えて結びつける「しかけ」を、どうしても大学側で用意するしかない。図書館のラーニングコモンズも、学習支援センターの SLA も、そうした「しかけ」の試みのだろうが、せっかくだから、一緒に何ができるか、探ってみてはどうだろうか。

●友活

友だち作り活動の支援をぜひ。どうすればいいかは、私には分かりませんが...

●チューター制度の拡大

かつては、中国語の授業で、先輩学生がボランティアで発音指導を昼休みに行うといったこともあった。今でも、留学生には学生チューターを付ける制度がある。しかし、チューターが必要なのは、留学生だけではないだろう。「大学で必要となる学術的な日本語」は、日本人なら自然に身に付くというわけではない。授業がつまらないのも、「大学教師語」という特殊な日本語の文法や語彙を新入

生は知らないからだ。全一年生に、少なくとも一学期は、先輩学生をチューターとして付けることはできないだろうか？

ライティング・スキルも、大学の特殊な日本語の一要素であって、単なる文章作成法ではない。考え方や論じ方、特に証拠の示し方を含めて、独特の日本語であり、それゆえに新入生には難しく思える。なので、授業ノートの取り方とか、教師への質問の仕方といった「大学コミュニケーション」（外の世界では成り立たないものだが！）を、体験的に伝えることのできる学生チューターが、全一年生に必要だと思う。

特に、最近の学生は、小中高と、塾でも個別指導に近い形で「先輩」に手取り足取り教えてもらうという習慣が身体に沁みついているので、塾講のように隣で親切に教えてくれるチューターが必要なのではないだろうか？

- 「社会常識」教育も

これは、非社会的に生きている大学教員には不可能なことなので、ぜひ学生の「一般的なコミュ力」向上のためにやってほしい。

- ・料理教室
- ・マナー教室（服装の TPO など）
- ・ファッション教室（脱イカトン！）

6 利用学生評価

センターでは、理系科目、英会話、ライティングの窓口において、利用学生に対し利用ごとにアンケートを配布している（質問項目は図 2-6-1 を参照）。

2015 年度の利用学生による総合評価は平均 95.5 点であった。（無配布・無回答もあるためサンプル数は 1432 件、うち有効回答数 1325 件。なお、100 点以上の点数をつけたものは 100 点として修正し換算）。また、「問題は解決しましたか？」と「対応に満足できましたか？」の質問には、表 2-6-1 の通り、ほぼ全ての対応で、「解決」「満足」との回答を得ることができている。

アンケート自由記述については付録 A を参照。

＜図 2-6-1. 2015 年度版「利用学生の声」アンケート用紙＞

＜表 2-6-1. 「利用学生の声」における評価結果【2015】＞

	Q 問題は解決しましたか？			Q 対応に満足できましたか？		
	した	どちらでもない	しなかった	できた	どちらでもない	できなかった
前期	725	65	22	829	20	7
後期	401	21	10	450	9	1
合計	1126	86	32	1279	29	8

（１）報告・発表等

- ①広島大学高等教育研究開発センター主催 第2回シンポジウム「大学と学生」
シンポジウムテーマ「学生による学生支援 ピアサポートの理想と現実」
（報告：SLA 奥田貴、参加：足立佳菜、鈴木学、SLA 山下琢磨）
- ②第37回大学教育学会 口頭発表
鈴木学・足立佳菜「学習支援に従事する学生スタッフのインセンティブに関する考察—東北大学学習支援センター（SLA サポート）の事例に基づいて—」
- ③第22回大学教育研究フォーラム 個人研究ポスター発表
鈴木学・足立佳菜「学習支援者研修プログラム開発の展開—東北大学学習支援センターにおけるSLA育成の取り組みから—」
- ④東北大学全学教育広報「曙光」No.41（2016.4.1 発行）への寄稿
足立佳菜・鈴木学「学習支援における「先輩の力」の可能性」

（２）学外調査・会議等

- ①九州大学基幹教育院（足立佳菜）
- ②公立はこだて未来大学 メタ学習センター
（センター員：足立佳菜、鈴木学 SLA：北原理弘、中村聡、五十嵐聡）
- ③平成27年度東北地域大学教育推進連絡会議（鈴木学、足立佳菜）
- ④国際基督教大学 学修・教育支援センター（関根勉、足立佳菜、鈴木学）

（３）訪問受け入れ

- ① 仙台白百合女子大学学修支援センター（教職員4名、学生8名）
- ② 福島大学総合教育研究センター、附属図書館（教職員6名、学生9名）
- ③ 愛知淑徳大学（教員1名）

（４）広報活動

- ①『ともそだち本2015』発行・配布
学習支援センターの利用案内兼学習支援本として『ともそだち本2015』を発行し、各学部の学部オリエンテーション時に配布をした（対象：新入生・新2年生 配布：約4200部）。
- ②HPブログ更新、コラム『先輩×学問』の更新

（５）学内貢献活動

- ①萩友会プレミアム懇談会 自由見学
- ②オープンキャンパスにおける活動



3. 部会活動報告

Summary

2015 年度の部会活動の特徴の一つは、部会の役割をより洗練させたことである。部会は、SLA 活動開始当初（2010 年度～）、通常のシフト内では顔を合わせることが少ない同科目担当メンバーとの交流を図ることが主目的であった。しかし近年、科目に紐づく対応スキルの向上にその役割をシフトさせつつある。そして 2015 年度はその傾向を意図的に強めたことに特徴があった。具体的には次のような変更である。

従来、学生対応が落ち着く後期セメスター中は、シフトの空き時間を利用しつつ、次年度の新 1・2 年生向けのセンター案内および学習支援冊子（『ともそだち本』）の作成を行ってきた。そして、部会活動としても、この冊子の部会担当ページを企画・編集することが後期セメスター中の主活動となることを恒例としてきた。このことは、部会メンバーの協同性の強化、自らの活動のをアウトプットすることによる SLA 自身の「SLA 認識」の向上などに効果があったと考えている。しかし、昨年度までの活動で部会活動が洗練され、定例会は「情報共有＋勉強会」というスタイルが定着したこと、それにより部会メンバー間で SLA としてのスキルを向上させようとする機運の高まりが見られたこと、そして、『ともそだち本』自体も一定程度情報が定常化させてよい段階に入りつつあったことなどを受け、2015 年度は、「『ともそだち本』の作成作業を部会活動としない」という方針転換を行った。これにより、年間を通して「情報共有＋勉強会」スタイルの定例会を行うことを全部会共通の認識としていったことが、本年度の特徴であった。

※ SLA 執筆原稿内にある「SLA サポート室」ないし「サポ室」の表記は、学習支援センターの常駐スタッフを指す呼称である。5 章の原稿も同様。

1 物理部会

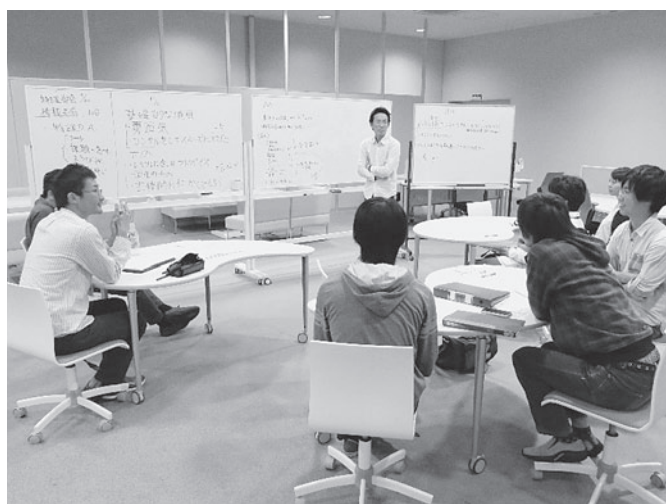
(1) 基本情報

<表 3-1-1. 2015 年度物理部会構成>

人数：前期 18 名、後期 19 名
前年度からの継続メンバー：12 名
部会長：博士前期課程 1 年、2013 年 10 月採用

<表 3-1-2. 物理部会 2015 年度開催ミーティング一覧>

	日付	曜日	時間	参加人数	全人数	出席率
定例1	2015/4/10	金	10:30~12:00	11	14	78.6%
定例2	2015/5/20	水	18:00~19:30	8	14	57.1%
定例3	2015/6/24	水	18:00~19:30	13	14	92.9%
定例4	2015/7/29	水	18:00~19:30	12	14	85.7%
定例5	2015/10/27	火	18:00~19:00	14	19	73.7%
定例6	2015/11/30	月	18:15~19:45	12	18	66.7%
定例7	2015/12/21	月	18:15~19:45	6	18	33.3%
定例8	2016/2/9	火	16:00~17:30	9	18	50.0%



（２）SLA による活動報告

2015 年度物理部会長 五十嵐 聡
(理学研究科物理学専攻 博士課程前期 1 年)

今年度の物理部会の動きを振り返り、反省点や来年度の物理部会への課題を報告する。

1. 各定例会の内容

■第 1 回部会（4 月 10 日）

昨年度の反省として、情報共有が十分に行われていない、部会活動に継続性や日々の活動への還元がされていない、といった意見が出された。そこで、情報共有としては重要なカルテのファイリングを行うことにした。また、今年度から部会で月ごとのテーマを決めてそれを通常勤務で実施し、次の部会で結果報告を行うという形で部会を行うことにした。今月は「学生の満足度を SLA が評価する」ことを通常勤務で実施することにした。

■第 2 回部会（5 月 20 日）

満足度調査の基準などをディスカッションした。SLA ごとに様々な基準で学生の満足度を測っていた。「コンサルと満足度の相関を調べる」が今月のテーマになった。

■第 3 回部会（6 月 25 日）

対応が難しかった事例を取り上げて、どのように対応するかを検討した。コンサルで普段聞いていることをグループに分かれてリスト化し、その後ディスカッションを行った。今月は対応の忙しさを考慮して、情報共有のやり方を見直して実践することにした。

■第 4 回部会（7 月 29 日）

前期の部会活動を振り返った。今期は色々と新しいことに挑戦したが、課題点が多く取り上げられた。合宿での部会活動報告の内容について意見を出し合い、資料を作成するメンバーを決定した。

■第 5 回部会（10 月 27 日）

後期初めての部会、サポ室から今期の部会活動についての説明があった。今期は情報共有パートと勉強会パートの二部構成で部会が行われることになった。情報共有ではシフト単位で報告することとし、金曜午前シフトが内容を精査し部会に臨むこととなった。勉強会パートでは、各会二人が教育関連のトピックについて講義を行い、それについてディスカッションをするという形式になった。この部会では講義を担当するメンバーを決定した。

■第 6 回部会（11 月 30 日）

情報共有パートでは、各曜日の対応状況や教科書の誤植情報の共有、難しかった対応について共有をした。勉強会では A 班がホスト紅林で「正統的周辺参加」、B 班がホスト白倉で「反転学習」のレクチャーをした後、ディスカッションを行い、SLA にどのように応用していくかを話し合った。

■第 7 回部会（12 月 21 日）

情報共有パートでは、各曜日の特徴や、解釈の難しい問題、対応が難しい学生について議論が交わされた。勉強会では大野が「レジリエンス」についてレクチャーをし、その応用法について議論した。

■第 8 回部会（2 月 9 日）

今年度の部会の流れを復習し、反省点や来年度に向けた提言を行った。

2. 補足と反省

ここでは、上述の各回の定例会報告では書ききれなかったものを補足しつつ、第8回の定例会で指摘された活動に対する反省を記述する。

今年度は昨年度の反省を踏まえ、昨年度まで部会で行っていた模擬対応の代わりに、「今月のテーマ」なるものを設定し、通常勤務で部会としてのタスクを決めその結果を次の月の部会へと報告することになった。最初にテーマとなったのが「満足度調査」であった。これは学生がその対応でどのくらい満足感を得たかということを SLA が評価するというものである。これは学生が SLA の対応にどのくらい満足していたかを意識しながら対応するという目的で行われた。しかしながら、合意形成が十分になされていなかった為か、学生の満足度なのか対応の満足度なのかを混同している SLA が多数であった。合意形成は部会に参加していない SLA ともしなくてはならないことであり、どのように部会で決まったことを周知するかは来年度も気を付けていかなければならない。

次の部会ではどのような基準で満足度を評価していたかが話し合われた。そこで、コンサルティングと学生の満足度がどのように関係しているかを考えてみようということで、コンサルしたことがどのように学生の満足度に関連するかを対応毎に行うことにした。しかしながら、この月は対応が忙しくなったためか、ほとんどの SLA がタスクを実行することができていなかった。

そこで部会ではコンサルティングで普段していることを話し合った。話し合いで上がったコンサル項目は重要なものでも最後の方まで出ないなど、普段から訊き忘れている可能性があるものも多くあった。またこの月のテーマは忙しさを考慮してできるだけタスクを少なくしたものに限定した。その結果、最初の部会で挙げられていたカルテのファイリングが全く行われていないので、それに代わる情報共有の方法を話し合い、実践することとした。この情報共有はこの月だけでいえばかなりの効果があったように思う。しかしながらそれが後期にはあまり実践されていなかった。

後期からは SLA 全体の方針として勉強会と情報共有の二部構成となった。そこで物理部会として、勉強会として SLA が講師役として教育関連のトピックをレクチャーし、それをどう SLA の対応に活かすかをディスカッションするという形をとった。トピックに関しては、サポート室からいくつか案をもらい講師役が選ぶことになった。しかしながら、後期は定例会の出席率が極めて低くなる傾向があり、定例会での活動を参加しなかった SLA に周知することができていなかった。出席率が悪い後期の部会については何らかの対策をしなければならない。

全体としては前期のテーマや後期のトピックもだが、抽象的な話題が多く取り扱われていた。もう少し実践的なものを選ぶほうが建設的であった。また、前期と後期の動きの連動性がほとんどとれていなかった。前期の活動で通常勤務と定例会の連動を意識して取り組んでいたにも関わらず後期ではそれが出来ていなかったのは大きな反省点である。また、部会に参加しなかったメンバーが部会活動に取り組みやすいようなシステムを作っていく必要がある。

おわりに

本年度の物理部会は昨年度までにはなかった様々な動きが見られたが、その反面課題点も多く見つけた年でもあった。また新規 SLA が増え、活動の主体が既存のメンバーから若いメンバーに移っていく時期で、次第に新規メンバーが定例会などでの発言が増えてきたのが印象的であった。来年度は今年度新規メンバーが部会の中心となり、積極的に活動することを期待しつつ本稿を終わりにしたい。

（３）センター員による活動報告

本年度の物理部会は、部会長のリーダーシップの下、年間を通して独自の目標を立てながら活動を展開していたことに特徴がある。

前期セメスター中の挑戦は、「部会ミーティングと日常の実践のリンクを強化すること」であった。この課題意識のもと、各定例会において1カ月の目標と実践課題を立て、次の定例会までにそれらを実施し、結果を次回定例会で報告するという流れを作ることに挑戦した。センターから見た本取り組みの課題は、①TO DO の明確化と目標共有の工夫、②目標と期間のバランスであった。①については、メンバーがそれぞれシフトに戻った際に何を実際に行うのかの理解にバラつきがあった。②については、毎月目標（課題）を設定し直していたが、1カ月で取り組むにはやや難易度の高い課題設定となっていた。物理部会でのこの経験を、次年度は全部会に還元していきたいと考えている。

後期セメスター中は、定例会の後半部分の勉強会を、「教育に関するキーワードを担当者が調べ、定例会で部会メンバーにレクチャーする」という会を実施することとした。これは、センター員および当時の物理部会長を含むSLA数名と共に、他大学を調査訪問した際に得た知見が基となっている活動である。前期・後期いずれの活動についても、詳細については部会長レポートを参照されたい。

積極的に新たな企画を取り入れた物理部会の活動であったが、その反面、各タスクや定例会におけるメンバー間の貢献度の格差が顕在化する形となった。物理部会は、元々SLAの中でも最も規模の大きい部会のため、チーム活動をいかに円滑に行うかは常に課題となっている。本年度最終ミーティングにおいて掲げられた「次年度の目標」は、「good 事例 集めて行こう 物理部会～新たな武器を手に入れる 2016～」であった。この背景には、①より実践的なスキル習得を目指したい、②参加者を増やすためにも議論して楽しい部会にしたいといった課題意識がある。次年度の活動に期待したい。

（足立）

2 数学部会

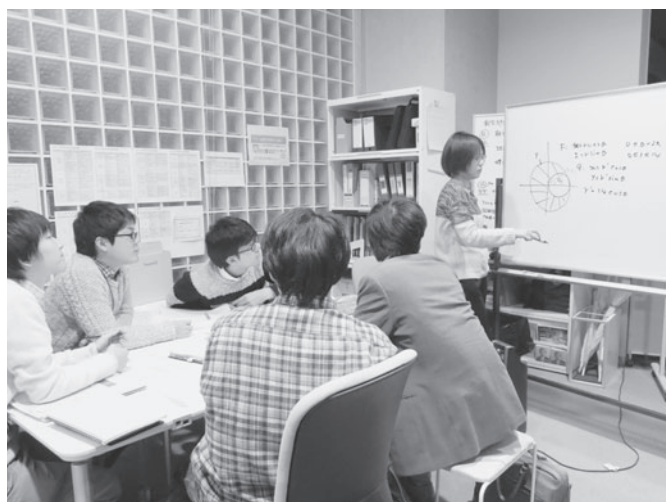
(1) 基本情報

<表 3-2-1. 2015 年度数学部会構成>

人数：前期 12 名、後期 10 名
 前年度からの継続メンバー：6 名
 部会長：博士課程前期 1 年、2014 年 1 月採用

<表 3-2-2. 数学部会 2015 年度開催ミーティング一覧>

	日付	曜日	時間	参加人数	全人数	出席率
定例1	2015/4/13	月	18:30~20:00	8	8	100.0%
定例2	2015/5/22	金	18:00~19:30	9	11	81.8%
定例3	2015/6/29	月	18:00~19:30	10	12	83.3%
定例4	2015/8/6	木	16:20~17:50	7	12	58.3%
定例5	2015/10/27	火	18:00~19:00	7	10	70.0%
定例6	2015/11/24	火	18:15~19:45	5	10	50.0%
定例7	2015/12/22	火	18:15~19:45	6	10	60.0%
定例8	2016/2/9	火	16:00~17:30	6	10	60.0%



(2) SLA による活動報告

2015 年度数学部会 部会長 中島啓貴
(理学研究科数学専攻 博士課程前期 1 年)

1. 概要

□メンバー構成

今年度は以下のメンバーで活動を行った：

博士 2 年...佐藤 (龍) / 博士 1 年...中村 (聡)、鈴木*、廣津*

修士 2 年...木村、久守、檜垣 / 修士 1 年...中島、千葉*

学部 4 年...珍田* / 学部 3 年...浅野*、吉野*

(*は今年度新規加入メンバー、下線は部会長を示す)

2. 定例ミーティングでの活動

原則的に、月に一度定例会を実施している。情報共有及びスキルアップが主な目的である。今年度は計 8 回行うことができた。各回の内容は以下の通りである：

■第 1 回 (4 月 13 日) ...キックオフミーティング

①シフト確認・調整

②部会体制確認 (部会長が中島に決定)

③前年度活動振り返り

情報共有およびケーススタディーのありかた、特に昨年度のケーススタディーのやり方について議論があった。どのような質問が来るかを先回りして考えるのは相手の分からないところを理解するうえで有意義であろうとの意見があった。

④前期セメスター中の目標・活動計画

情報共有については行列を高校で習っていない学生が入学してくることから、線形代数についての事例について特に詳しく共有することとなった。ケーススタディーについては、解析学を中心に昨年度のカルテから次の月に質問がありそうなものを先回りして行うことになった。

■第 2 回 (5 月 22 日) ...情報共有・ケーススタディー

①ケーススタディー (ホスト：中村)

テーマ：「数列の収束の概念 (ε -N 論法) を説明する。」

活動理念：学生対応時の技の引き出しを増やそう

活動内容：数列の収束の概念を説明する。その後各々の良い点、悪い点をディスカッションする。

注目すべき点：10 分間の個人作業をしてから発表をした (今までは始めからペアで話し合いをしていた)。また、最後に個人作業とディスカッションを踏まえて気づいた自分の得意技をスローガン風に寄せ書きした。

②情報共有

当初のテーマであった線形代数について、昨年度までの対応と変更すべき点は (今のところ) ないのではないかという声が多かったので線形代数に関する情報共有は行わなかった。その代わりに数学部会の今後の目標を話し合った。その結果「情報共有を日常的に行う」ことが目標となった。具体的

には、部会ノートの活用（昨年度は行っていなかった）とカルテのシェアをすることとなった。カルテのシェアは、学生対応後に作成するカルテで共有したいものがあつた場合、決めた箱に入れておき、数学部会のメンバーがチェックするというものである。部会ノートやシェアカルテはシフト中に必ずみる事とした。

■第3回（6月29日）…情報共有・ケーススタディー

①情報共有

先月から始まった部会ノートとシェアカルテの活用についての話し合いをした。これから、部会ノートは書くことも必須とした。また、他の人のカルテをみて良いと思ったものを次回の部会までに一人一枚ピックアップすることとした。

この一か月間での情報共有としては、a)数理統計の質問が多いが、統計の得意なSLAが少ない、b)難しいレポートの質問への対応に悩んでいる、c)数物演習で面積分や線積分のイメージを聞かれた際どう伝えるべきかが挙がつた。

②ケーススタディー（ホスト：中島）

テーマ：数学科の学生に対応するときに困っていることを話し合う

困っている事：

- ・数学科は考えることが大切だからどこまで教えたらいいのか？
- ・数学科の学生に求められるものと実際のレベルのギャップ
- ・難しい問題にSLAも苦戦し時間内に対応できない。

注目すべき点：対応のシミュレーションではなく、ディスカッション形式で行った。数学メンバーのそれぞれの意見をよく聞くことができた。

反省点：意見を聞くところまでは良かったが意見をまとめる作業が難しかった。

■第4回（8月6日）…研修合宿での部会報告の内容検討・ケーススタディー

①研修合宿 部会報告の内容検討+工程の決定

②ケーススタディー（ホスト：木村）

テーマ：線積分・面積分を数学科でない学生にどう教えるか

内容：SLAのペアと問題が指定され、ペアごとに相談しホワイトボードで発表。その後、学生が躊躇くだろうポイントや解決策を共有。

注目すべき点：前回とは対照に、工学部等の数学科でない学生を対象に考えた。数学科の学生とのニーズの違いを意識する回になった。工学部の数物演習の対応では、イメージを聞かれることが多いためその対策でもある。

■第5回（10月27日）…後期の定例会の動き決定

①後期定例会の動き確認、②勉強会担当者決め

■第6回（11月24日）…情報共有・ケーススタディー

①情報共有

- ・「対応する時に学生にメモを取らせるべきか」という検討・意見交換をした。
- ・解析学の良いテキストを聞かれたときに困ったという意見があつたので、相談した。

②勉強会（ホスト：鈴木）

テーマ：「聴き上手になって、” コンサル力・対応力” を上げよう！！」

内容：目を合わせるトレーニング、会話トレーニング、あいづちの大切さを実感するワーク

目的：SLA が学生から話を引き出すことができるようにする。「一方的な説明」だけでなく「対話」を目指す。

■第7回（12月22日）…情報共有・勉強会

①情報共有

重積分の解法について議論があった。

②勉強会

テーマ：数学部会のメンバーそれぞれ何を考えているか知る

内容：「日々の学生対応で感じていること」「数学部会のこれからのビジョン」についてあらかじめブログで意見を出しておいて、それを参考に話し合いをした。

■第8回（2月9日）…年報作成のための振り返り

2. 合宿活動報告

合宿では以下のように部会活動の報告をした。

【メンバー紹介】

・欠席者についても紹介 ・基本情報(学年・出身・専攻) ・アンケートの面白い回答をピックアップ

【部会活動の紹介】

- ・ケーススタディーで行ったことの紹介
- ・個人ワークや寄せ書き、ディスカッション等のチャレンジしたことを紹介

3. 終わりに

今年度の数学部会では、新しい試みをいくつか行った。ケーススタディーでは、個人ワークやディスカッション、コミュニケーション講座といった様々な方法でメンバーのスキルアップを図った。また、情報共有ではシェアカルテや部会ノートを今年度から活用しメンバー間の交流を促した。しかし、試行錯誤が多くメンバーそれぞれが方針に悩んでいたかもしれない。特に情報共有では何を共有すべきかが悩ましかった。

試してみたときに、失敗してしまったと思うことがいくつかある。その一つとして挙げると、シェアカルテを行う際に、ひと月の間に一人一枚良いと思った他の人のカルテを Pick up するというタスクを決めたことがあった。しかし、タスクで決めると良いと思ったものがなくても無理やりシェアすることになってしまうため情報が無駄に多くなってしまい、質が落ちてしまった。メンバーの負担にもなっていたように思う。シェアカルテに関しては、来年度も続けるのであればシェアする基準を明確にすべきであろうか。また、ノルマを決める際には期間の設定・確認や明確な理由と合意が重要であると感じた。

来年度へ向けては、情報共有では何を共有すべきかを考えていく必要がある。また、自分の対応を批判的に検討してもらいたいとの意見があったので、対応ビデオをとって、ビデオを参考にした意見交換ができると良いと思う。対応ビデオについては、今年度も案があってビデオは撮っていたのだが、部会で使うことはなかったので来年度に期待したい。

（３）センター員による活動報告

2015 年度数学部会は、「情報共有」＋「勉強会」の形を比較的安定的に保ちながら活動を進めてきた。各回の「勉強会」では、新カリキュラムを受けて入学してくる 1 年生が「行列」を習っていないことに着目し、当該部分の質問が多くなることを見越してその対策を図ったり、質問が多く来るトピックの教え方について議論をしたり、ディスカッション形式で意見交換をするなどしてきた。他部会と比べても、比較的多様な趣旨の「勉強会」を実施できたと思われる。特に、企画担当者は熱心に会の準備を進めており、その点は数学部会の成果であった。

一方で、「情報共有」のあり方には課題が残ったとセンターとしては考えている。これは定例会や部会そのものの趣旨に関わるものであるが、「情報を共有すること」の意味や「他者の事例から学ぶこと」についての理解がなかなか共通認識とならない場面も見受けられた。これに伴って、「作業」として決めたものが自己目的化してしまう傾向もあり、「部会でそもそも何をしたいのか」ということを議論する必要性が生じてきた 2015 年度の活動であった。こうした現状を一部反映し、第 7 回ミーティングに際しては、事前に話したいことを、ブログを利用して募っておくなどの工夫も取り入れ、部会活動の改善を模索していった。

最終ミーティングで掲げられた「次年度の目標」は、「できることを約束事に！決めたことを実行する！」であった。この目標の背景にあるのは、やろうと決めた作業が立ち消えることがままあったことに対する反省である。ただし、上述の通り、何のためにその作業を行っているかの認識を伴わせることが作業の完遂を目標とすることよりも優先されるべきであろう。センターとしては、次年度の活動のスタートを切る上で最も重要なことは、数学部会のメンバーが「数学部会の課題」の自己認識を持つことであると考えている。学部 3 年生という若い戦力もメンバーに加わった中で、どのように数学部会としてのスキルアップを“共に”図っていくことができるかに期待したい。

（足立）

3 化学部会

(1) 基本情報

<表 3-3-1. 2015 年度化学部会構成>

人数：前期 7 名、後期 7 名
前年度からの継続メンバー：4 名
部会長：博士課程前期 2 年、2013 年 11 月採用

<表 3-3-2. 化学部会 2015 年度開催ミーティング一覧>

	日付	曜日	時間	参加人数	全人数	出席率
定例1	2015/4/9	木	17:00~18:30	6	6	100.0%
定例2	2015/5/20	水	18:00~19:30	6	7	85.7%
定例3	2015/6/24	水	18:00~19:30	7	7	100.0%
定例4	2015/8/6	木	18:00~19:30	6	7	85.7%
定例5	2015/10/30	金	11:00~12:00	5	7	71.4%
定例6	2015/11/30	月	18:15~19:45	5	7	71.4%
定例7	2015/12/16	水	18:15~19:45	4	7	57.1%
定例8	2016/3/3	木	16:00~17:30	6	7	85.7%



(2) SLA による活動報告

2015 年度化学部会 部会長 山下琢磨
(理学研究科化学専攻 博士課程前期 2 年)

1. 今年度の化学部会の概観

今年度の化学部会は、博士 3 名、修士 2 名、学部生 1 名（うち新規メンバーは博士 1 名、学部生 1 名）でスタートし、6 月に学部生をさらに 1 名加えて本格的な活動が開始した。計 7 名中 3 名が新規メンバーということで、学生対応におけるノウハウの共有や研修などの面で新しい風の吹いた年であった。近年は物理化学かつ理論研究の背景をもつ SLA が多かったが、今年度は実験研究や有機化学・生化学の背景をもつ SLA が加わり、化学部会の多様性が広がった。

2. セメスターを通じた化学部会の活動

前期セメスターを通じての活動としては、「待ち時間対応の工夫」に取り組んだ。後期セメスターでは、セメスター前半の利用者が例年少ないことを逆手に、次年度前期セメスターの対応に向けた教科書の誤植リストの作成を中心に取り組んだ。また、前期セメスターに不足していた新規メンバーの研修のため、模擬対応のビデオリフレクションを、シフトを超えて展開した。以下にその詳細を記す。

■待ち時間対応の工夫

この活動は、メンバーの一人から「質問に来る学生が多く、次の対応まで待ってもらうことがときどきあるが、その待ち時間を有効に使ってもらえるような工夫を何かできないか」という課題提起から始まったものである。

単純には、混雑時、ただ待たせるだけではなく、一度問題を見て、「どのあたりを復習しておいてくれるとよいか」を一言指示できると良いと考えた。対応の効率化を図る目的もあるので、「どのような指示をしたのか」をカルテに記載し、個々人のレパトリリーを増やすこととした。

これとは別に、学生自身が待ち時間に疑問点を整理する手助けをする資料を作成することにした。前期の質問に多い量子化学に関して言えば、学生の質問の内容よりはるかに基礎の部分につまずきがあり、それを SLA が探り当てするのに時間がかかるケースも多い。そこで、量子化学のつまずきを洗い出し、かつ、そのつまずきに対して参考資料などが提示できるリストを作成することになった。紆余曲折の議論の末、「量子化学理解度 CHECK」という、量子化学の各学習段階で理解しておいてほしい質問をまとめた資料を作成した。難易度や活用法にまだ課題はあるものの、化学部会内の共通認識を図るという副産物も得られた。

■教科書の誤植リストの作成

複数の授業で使われている物理化学の教科書に誤植が散見され、これに端を発する対応の非効率的な長時間化を回避するため、後期セメスターのうちに誤植リストを作成することとした。化学部会メンバーのスキルアップも兼ねて、それぞれの問題を解き、解法を集約した。

■ビデオリフレクション研修

化学部会のメンバーはシフトに 1 人ずつ入ることが多く、学生対応の研修が不十分になりがちであるという課題があった。模擬対応を録画したものをシフト間で共有し、改善点やよかった点を指摘しあった。指摘する側の SLA への還元も大きかった。

3. 月定例部会における活動

定例部会ではセメスターを通した活動の打ち合わせに加え、情報共有と勉強会を行った。

■前期第1回 キックオフミーティング（4月）

新規 SLA への情報還元の方法、部会の運営方法について話し合った。待ち時間対応の工夫についての活動をスタートさせた。

■前期第2回 定例会（5月）

自然科学総合実験の質問対応における注意点と教科書のミスリーディングを誘う部分の解釈を共有した。勉強会では、「化学・物理の基礎的な概念で、説明が難しいものを説明する技術」を磨くことを目標にした。この背景には、物理未履修の学生が量子化学の導入部分でつまづくことが多いため、対応の中で直感的な説明を行う術を SLA が身につけるべきだという意識があった。「ポテンシャル」「量子」を具体例として SLA 経験の長いメンバーに解答役を担ってもらい、その説明についてメンバー全員で議論した。

■前期第3回 定例会（6月）

テスト期間に混雑した場合の学生対応における工夫を経験の長い SLA と共有した。「少ない対応時間でも質問に来た学生の満足度を保ち、質の高い学習支援を実現するにはどうしたらよいか」という問題は化学科目の質問傾向からも重要な技術である。勉強会では「熱力学の対応において応用などの背景をどのように対応に盛り込んだらよいか」についてアイディアを出し合った。

■前期第4回 セメスター総括会（8月）

セメスター全体を総括し、合宿での発表内容を打ち合わせた。チェックリスト作成の反省も行った。

■後期第1回 方針決めミーティング（10月）

セメスター前半の利用者が少ないことを見越して、物理化学の教科書の誤植を洗い出すことにした。また、（テスト直前ではない）早期利用の啓発をしたいという提案があり、どのような学生を対象にしたいか、という理念について話し合った。

■後期第2回 定例会（11月）

後期セメスターの質問として多い有機化学の対応について、具体的な例題をもとにどのような説明方針・方法をとるかを演習した。対応の中で、学生に「教える」部分と、「考えてもらおう」部分をどのように判断するかなどを議論した。

■後期第3回 定例会（12月）

熱力学の誘導付きの設問について、SLA 側と学生役に分かれて実践的な模擬対応を行った。教科書を用いた説明の時に学生が質問しやすくする工夫（本の視点を合わせる、記述に対する共感を示す、など）や、対応の奥行きを広げる発展的な話題など議論した。

4. 全体総括

前期は部会での勉強会に多くの時間を割けなかった代わりに、理解度チェックの資料作りをする中で、メンバー間での学習支援観を議論することができた。後期は勉強会の体制が確実になり、ビデオリフレクションなども含め、スキルアップ研修の内容も充実してきた。新規メンバーの多い年で、方針や理念の共有、対応技術の引き継ぎなどで試行錯誤があった。SLA と利用学生の双方に実りある場を築く上で、今年度の経験は、来年度の活動を考える上で有益であると考えている。

（３）センター員による活動報告

化学部会は、総勢 7 名の小規模部会である。最長 SLA5 年目のベテランメンバーを擁しながら、本年度は学部生 2 名を含む新規メンバー 3 名を迎え、いかに“知の継承”を行っていくかを課題として活動を展開していった。これに関わる活動として、本年度の化学部会の特徴的な活動を 2 点紹介する。

1 点目は「化学 A チェックリスト」の作成である。これは、当初の目的としては、「テスト直前に全範囲分らない」という形での質問が多い化学の利用傾向を鑑み、質問待ちになってしまう時間を有効活用してもらうことを想定して取り組み始めたものである。具体的には、「化学 A」のポイントを網羅的に取り上げた A4 用紙 1 枚の問題リストを作成するというものであった。しかし結果としては、諸々の課題があり、この目的で実際に学生に対し使用するには至らなかった。ただ当該作成物は、化学と物理メンバー間での化学 A の守備範囲を把握する契機となり、今後の化学メンバーの勉強材料として活用する可能性を持つものとして、良い引き継ぎ資料になったと思われる。

2 点目は、「ビデオリフレクション」の活用である。ビデオリフレクション自体は、全 SLA を対象に後期セメスターから取り入れた研修方法の一つであったが、化学部会がこれを意図的に部会の活動としても取り入れて行った。その背景には、化学部会はメンバーが少なく互いの対応を見る機会がほぼないため、特に新規メンバーの育成という点で課題を抱えていたという事情がある。この点についての問題提起を部会長から受け、対策を共に話し合う中で、①ベテランメンバーが課題設定する→②新規メンバーが模擬対応をしビデオに撮影する→③ベテランメンバーを中心にビデオを視聴しコメントを付すという形の活動を取り入れて行った。この取り組みは、新規メンバーだけでなく、コメントを付した側にも学びが大きいという感想が聞かれ、「ビデオリフレクション」の動きを全メンバーに波及させる契機となった動きであった。

最終定例会では、次年度の目標として、①誤植リスト作成の継続、②メンバー増員、③部会のまとまりのよさの継続（文化の継承）が挙げられた。②はセンターとしても課題であるが、少数精鋭の利点を活かした活動も引き続き期待したい。

（足立）

4 英語部会

(1) 基本情報

<表 3-4-1. 2015 年度英語部会構成>

人数：前期 10 名（5 名）、後期 10 名（6 名）	※（）内留学生数、内数
前年度からの継続メンバー：4 名	
部会長：前期）学部 4 年、2014 年 10 月採用 後期）博士課程前期 1 年、2014 年 4 月採用	

<表 3-4-2. 英語部会 2015 年度開催ミーティング一覧>

	日付	曜日	時間	参加人数	全人数	出席率
定例1	2015/4/13	月	16:30～18:00	7	9	77.8%
定例2	2015/5/26	火	18:00～19:30	7	10	70.0%
定例3	2015/7/1	水	18:00～19:30	8	10	80.0%
定例4	2015/7/27	月	18:00～19:30	7	10	70.0%
定例5	2015/10/27	火	18:00～19:00	8	10	80.0%
定例6	2015/11/25	水	18:15～19:45	5	10	50.0%
定例7	2015/12/16	水	18:15～19:45	6	10	60.0%
定例8	2016/2/8	月	13:30～15:00	5	10	50.0%



(2) SLA による活動報告

2015 年度英語部会 部会長 寺岡夕里
(理学研究科物理学専攻 博士課程前期 1 年)

1. はじめに

2015 年度の SLA 英語部会は、昨年度から継続の SLA4 人に新規 SLA6 人を加えた計 10 人(内留学生 6 人)で活動を行った。継続 SLA が少なかったことと留学生が多かったこともあり、今年度の活動は原点回帰と革新により特徴づけられると思う。前期は従来通り昼休み以降に英会話カフェと lon1 を行ったが、後期は活動を 4 コマ・5 コマに絞り昼休み・3 コマは予約があった場合のみ活動を行った。定例会は前期・後期ともに 4 回ずつ行った。

2. 定例会

(1)第 1 回(2015 年 4 月日)

本年度最初の英語部会の活動として、英語部会メンバーの顔合わせ、前年度の振り返りと資料の確認、そして本年度前期の進め方の確認を行った。出席者は、服部、酒井、寺田、アハメド、ホセ、スミット、李の 7 名。前年度の振り返りの中では、情報共有の重要性や、参加者の英語スキルに差があった時の対処法などについて前年度の SLA の体験をもとに新旧メンバーで共有した。本年度の基本的な活動の流れの確認をしたのち、前期の目標や対応の進め方を各シフトのメンバー同士で話し合いを行った。各シフトの方針は「ゲームやビジュアル教材を活用するなど多様な方法で英語学習を促進する」「ディスカッションなど実践的な学習をメインにする」など様々であった。

(2)第 2 回(2015 年 5 月日)

第 2 回の英語部会からは、基本的に前半は SLA 間での情報の共有、後半はケーススタディーを行う流れで行われた。情報共有の課題として、英語初心者との話題の膨らませ方、利用学生がタブートピック(宗教など)に言及した場合の対処法などが挙げられ、それぞれについて議論を行った。

ケーススタディーの前半は、アハメドと寺田が、後半は酒井がカフェの実演を行った。発言していない利用者がいた場合に SLA が質問することで発言を促すことや、トピックが一部の利用者にとって難しい場合に話題の転換をすることの重要性を再発見できた。

(3)第 3 回(2015 年 7 月 1 日)

第 3 回の定例会は新メンバーのシンと復帰メンバーの寺岡を含めた計 8 人で行われた。前半の情報共有は各 SLA の悩みに他の SLA がアドバイスをする形で進められた。また利用者のニーズが多様化する対策として、それぞれのニーズに合うコンテンツを提供することの大切さを再確認した。後半の勉強会ではスミットと五十嵐によるカフェの実践が行われた。2 人とも利用学生に英会話に親しんでもらう、楽しんでもらうことを重要視していると感じられた。

(4)第 4 回(2015 年 8 月日)

第 4 回は夏休み前最後の部会であった。前半は夏休み中に実施される合宿で英語部会の活動紹介をどのように行うかを話し合った。実際に合宿に参加できるメンバーが少なかったこともあり、具体的な対応課題についての言及はあまりせず、部会のメンバー紹介を中心としたプレゼンを行うことにしてそのためのビデオ撮影を行った。

後半のツール共有では、シンがホストとなってロールプレイを行った。演習後に振り返りを行い「ボディランゲージでは英語の練習にならないのでは」といった率直な意見が取り交わされた。

(5)第 5 回(2015 年 10 月日)

後期 1 回目は新規メンバーの張とトゥを含めた 8 人が参加した。サポート室からガイドブックが配布され、改めて英会話支援の理念や対応の基本形態を確認した。また後期セメスターで行いたい作業として①将来の後輩 SLA に残す tips(対応のコツやアドバイス)②対応の流れのアドバイス③アクティビティの教材・説明資料の作成が挙げられた。

(6)第 6 回(2015 年 11 月 25 日)

第 6 回(後期第 2 回)は酒井、寺岡、寺田、トゥ、ホセが参加した。後期セメスターは利用学生が少ないこともあり、利用学生の情報交換や「○○の様な学生が来たらどうする？」とのケーススタディーを入念にできた。後半の勉強会ではホセが用いている教材の紹介をした。この部会で印象的だったのが、対応中に行うアクティビティのテーマについて議論が行われたことだ。相手は大学生だから幼稚なものや実用性の無いものは避けている人も居れば、実用性が無くとも想像力を働かせ楽しんで企画を行うことの重要性を説く人も居た。時間の都合上議論は途中で打ち切りとなったが、これから考えていきたい。

(7)第 7 回(2015 年 12 月日)

後期 3 回目となる第 7 回の部会の前半では、全体的な傾向として春休み中の SAP に向けた準備のために SLA を利用しに来る学生が増えていることを確認した。後半のツール共有はトゥが担当した。親しみやすい内容からはじめて、徐々に本格的な英語スピーチに移行していくようにするという工夫がみられた。

(8)第 8 回(2016 年 2 月日)

2015 年度最後の第 8 回英語部会定例会は 2 月 8 日に行われ、一年を振り返り、SLA 英会話の運営に関しての課題を出した上で改善点を議論した。もっとも議論が盛んだったのは SLA 個人個人が持っている教材やゲーム手法の共有・公開についてだった。春休みを使って SLA 個々人が持っている教材をまとめカテゴリーに分けることとなった。また SLA 全員が使えるツールを決めることにより SLA 英会話としての統一性を図り、企画をある程度利用学生に公開することにより対応に何が期待できるかを学生に知ってもらうことができると考えた。以上を踏まえると、第 5 回の定例会で確認した作業の内、2015 年度後期では③はできたが①と②はあまりできなかったと思う。この課題は 2016 年度に引き継ぎたい。

3. その他の活動

2015 年度は学生対応外の活動が活発だったと思う。上記の③もそれに当たるが、他にも英会話人カルテ作成が挙げられる。英語部会では元々、学生対応を振り返る活動報告書と学生の動向を記入する人カルテがあり、SLA は活動終了時に両方の記入をしていた。2015 年度後期から人カルテは廃止されたが、後期の活動を行っていくうちに、英語部会では利用学生の理解を深めることと同一利用学生への活動内容を共有することの重要性に着目し新たに人カルテを作成した。

前期まであった人カルテから大きく改善されたが、新旧人カルテの大きな違いを一つあげるならば人カルテは紙媒体だということだ。英語 SLA はカルテを手にとって活動することができるため、利用

学生のこれまでの動向を踏まえながら学生に適した対応ができると考えられる。この新人カルテは2016年度前期から導入する予定である。

4. 終わりに

英語部会は学部・修士で卒業する SLA が多く、3 学期以上活動をしている SLA が少ない部会である。メンバーの入れ替わりが頻繁にあるなかで、どのように意識をまとめ活動の質を上げていくかが課題だが、常に新しい意見が入ってくるという利点を生かしこれからも活動に励みたい。

（３）センター員による活動報告

英語部会は、部会長を置きミーティングを定期開催するという部会の基本体制自体が整い始めたのが昨年度の事であり、これを恒常化させることと、理系とは異なる英語部会としての部会・定例会のあり方を模索することが2015年度の課題であった。

本年度の英語部会定例ミーティングは、主に、「情報共有」と「企画共有」の２部構成で開催された。「企画共有」は、各々のSLAが「英会話カフェ」で行っているアクティビティについて他のSLAにプレゼンないし模擬実演し、互いのアクティビティを学び合うというものである。互いのアクティビティを知ることは、次の３点の目的が想定されていた。第１に、他の人の企画を知り、自分の企画のラインナップを増やす事（自身のスキルアップ）、第２に、他の人の企画・特徴を知ること、SLA英会話全体の資源を把握し、必要に応じて利用学生さんに他のSLAを紹介できる（チャンネルをつなぐ）役割を担えるようにすること、第３に、SLA同士の交流を図ること、である。しかし実際は、目的３については一定程度効果があったものの、第１・第２の点については、目的として自覚化されることが少なかったように思われる。ただし、本年度の総括をする最終ミーティングにおいて、第１の点・第２の点に繋がる課題意識が部会メンバー間で話し合われ、次年度の目標として「次世代につなげる伝統をつくる！～プラットフォームの構築～」が掲げられた。

英語部会は、メンバーの入れ替わりサイクルが比較的早いこと、多様な学部のメンバーの集まりであることから日程調整が困難な場合が多いこと、多国籍なメンバーの中での議論の難しさなど、チームとしての活動に多くの課題を抱えている。センターとしてもバックアップをしながら、まずは、最終的に総括された次年度目標の思いを次年度メンバーに繋げること、そして、本目標の達成に向け、具体的な活動が展開されることを期待したい。

（足立）

5 ライティング部会

(1) 基本情報

＜表 3-5-1. 2015 年度ライティング部会構成＞

人数：前期 6 名、後期 5 名
 前年度からの継続メンバー：2 名
 部会長：博士課程後期 2 年、2014 年 1 月採用

＜表 3-5-2. ライティング部会 2015 年度開催ミーティング一覧＞

	日付	曜日	時間	参加人数	全人数	出席率
定例1	2015/4/13	月	11:00～13:00	5	5	100.0%
定例2	2015/5/25	月	18:00～19:30	6	6	100.0%
定例3	2015/6/29	月	18:00～19:30	5	6	83.3%
定例4	2015/8/3	月	18:00～19:30	5	6	83.3%
定例5	2015/10/14	水	18:30～19:30	4	5	80.0%
研修	2015/10/22	木	18:00～19:00	4	5	80.0%
研修	2015/10/29	木	18:00～19:00	4	5	80.0%
定例6	2015/11/5	木	18:00～19:30	5	5	100.0%
研修	2015/11/12	木	18:00～19:00	5	5	100.0%
研修	2015/11/19	木	18:00～19:00	5	5	100.0%
研修	2015/11/26	木	18:00～19:00	5	5	100.0%
研修	2015/12/3	木	18:00～19:00	4	5	80.0%
研修	2015/12/10	木	18:00～19:00	5	5	100.0%
研修	2015/12/17	木	18:00～19:00	5	5	100.0%
研修	2016/1/7	木	18:00～19:00	5	5	100.0%
定例7	2016/2/9	火	16:00～17:30	2	5	40.0%

（２）SLA による活動報告

2015 年度ライティング部会 部会長 寺川直樹
(教育学研究科博士後期課程 2 年)

1. はじめに

今年度は前期・後期でメンバーが入れ替わったが、部会メンバーを一定数保つことができた。それにより、試行錯誤しながらではあるが、徐々に「部会」として活動することができるようになってきた。これもひとえに、職員の足立さん、学さん、真衣さんならびに昨年度 SLA を務められた近藤さん、千葉さん、中野さんのご尽力の賜物であることをここに付言し、改めて敬意を表したい。なお、今年度メンバーは以下の通りである（敬称略）。

- ・前期：寺川（教・D2＝部会長）、近藤（国・D3）、張（経・D3）、豊島（文・D3）、福長（文・D1）、林田（理・M1）
- ・後期：寺川（部会長）、福長、祝（文・D1）、林田、成田（教・B3）

2. 定例ミーティングでの活動

今年度は部会メンバーを一定数確保できたことにより、定例ミーティングを行い、その中で、各メンバーの取り組みについての説明や情報共有、事例検討等を行ってきた。以下、各回の概要について報告する。

まず、第 1 回（4/13）では、部会体制の確認や前年度ライティング部会活動報告を経て、今年度前期セメスター中の目標・活動計画として、①全学で開講されている授業との連携、②教材作成、③部会内でのスキル向上に関する取り組みを柱とすることになった。また、足立さんや前年度も SLA を務めた近藤さんを中心に、対応のノウハウや心構え等について説明していただき、新規 SLA を中心に質疑応答も行った。

続く第 2 回（5/25）では、まず情報共有を行い、豊島さんからはライティング通信の企画・進捗状況について説明していただいた。次に、張さんから『文章チュータリングの理念と実践』（佐渡島・太田、2013）のブックレビューを、そして林田さんからは理系レポートの概要について報告があった。残る 3 人は、5 月中の活動について総括を行った。その後、近藤さん主導で、既存の文書をもとに事例検討が行われた。

第 3 回（6/29）の際には、情報共有では、寺川からライティング教材集の企画について説明があり、作成方針や今後の役割分担等について協議した。また、福長さんからはブックレビューの企画について説明があり、今後の作成方針等について協議した。さらに、各 SLA の作業の位置づけを確認し、相互に関連づけながら作業を進めていくことの確認も行われた。その後、実際に対応が行われた感想レポートの質問を題材に、事例検討を行った。

そして第 4 回（8/3）では、前期セメスター最後の部会ということで、それぞれ活動を振り返って感じたこと等を挙げ、合宿活動報告の構想について話し合いを行った。

なお、後期定例ミーティング（通称「夜会」）については、4. を参照のこと。

3. 合宿活動報告（前期活動報告）

合宿に参加した林田さんと寺川によって以下の4点について報告を行った。

1つ目が、ライティング通信の発行である。豊島さんを中心に、1、2週間に1回ほどのペースで発行し、SLA サポート室前にて配布した。合計7号分発行した。本企画には2つのねらいがあり、1つ目として、スキル・ノウハウだけでなく気軽に読んで「ちょっとためになる」読み物を作成すること、2つ目として、ライティング部会の活動をアウトプットすること、が挙げられる。

2つ目として挙げられるのが、理系ライティングへの試みである。林田さんを中心に、理系レポートと文系レポートとの比較を通じて、理系レポートへの対応の仕方を考えたり、実験レポートのテンプレートや Q&A を作成したりするとともに、そこで得られた知見を、理系学生に文系レポートを説明する際に応用する方法等について検討した。

そして3つ目が、ライティング教材集の作成である。寺川らを中心に、様々なライティング関連書籍に散見される図表等を集約し、窓口対応時の利用ならびに SLA のスキルアップのための教材集を作成した。ライティング通信や理系ライティング関連資料、ブックレビュー、前年度作成のポスター等も盛り込み、現在も鋭意作成中である。

4. その他活動

ライティング部会は部会活動もさることながら、先述の通り、ライティング通信の発行等、他の特色ある活動を展開してきた。以下、先述の3つの取り組み以外の活動について報告を行う。

1つ目が、SLA 文庫にあるライティング関連書籍のレビュー作成である。現在、3つの書籍について試験的にまとめたが、まとめ方やその活用方法について方針が定まらず、すべてのレビューを作成することができていない状態にある。（福長・寺川が一部改変）

2つ目が、全学教育で開講されている授業との連携である。昨年度に続き、今年度も多くの授業と連携させていただき、レポート作成前・中・後に窓口を利用してもらったうえでレポートを提出する等の取り組みにより、ライティング窓口利用学生数を一定程度確保することができた。ご協力いただいた先生方には、この場を借りて御礼を申し上げたい。

3つ目が、書面对応の実施である。従来のスタンス通り、窓口対応を基本とすることに変わりはないが、後期セメスターより、学生の窓口利用促進のために、1人1回限定で、前期セメスターに提出したレポートについて書面によるアドバイス（添削）を行う取り組みを実施した。これをうけて、10/29の夜会では福長さん主導による書面对応の方法に関する研修を行った。しかし、実際に利用した学生はいなかった。

4つ目が、予約による窓口対応である。後期セメスターより、ライティング部会では、窓口に常駐する形式ではなく、他の部会では導入されていない予約による窓口対応の制度を開設したが、実際に利用した学生はいなかった。

5つ目が、後期定例ミーティング（通称「夜会」）である。先にも触れたように、後期セメスターから、ライティングの窓口対応は予約制となったことをうけ、新たに毎週木曜18時から19時半にかけて「夜会」を実施した。主な内容としては、後述するライティングセミナーの企画案の報告ならびにプレ発表が中心で、その他、福長さん主導による書面对応に関する研修や、事例検討等も行った。

そして6つ目が、後期セメスターから実施したライティングセミナーである。11月から12月にか

けて全5回実施し、昼の時間帯に1回30分のセミナーを2回繰り返す形式で行った。各回の担当を決め、夜会時に企画案の報告やプレ発表を行うことで内容を精査し、そのうえでセミナーに臨んだ。また、企画内容を考える際には、先輩としての経験値や体験談、質問事例等の情報を盛り込むように心がけた。

5. おわりに

以上のように、今年度は昨年度の取り組みを引き継ぎながら、その内容をさらに展開してきたが、未だその多くが「試験段階」にあることは否めない。次年度は、これまでの取り組みの地盤をさらに固めていき、さらなる飛躍を遂げるべく精進していく所存である。

具体的には、後期セメスターで取り組んだセミナーを、アカデミックスキル編とライティング・スキル編の二部構成とする等、「ライティング」の定義をより広範に捉え直し、ライティング部会の対応範囲の射程を拡張したい。また、このようなセミナー活動をはじめとして、ライティング部会の取り組みを様々な形で発信していくことも必要であろう。そして何よりも、事例検討等を通じてライティング担当 SLA 自身のスキルアップが必要不可欠であるとともに、対応の「型」の作成等、新規 SLA の育成に向けた取り組みにも着手し、ライティング部会のさらなる発展を導くための道筋を立てたい。

まだまだ至らぬ点も多いが、ライティング部会のメンバーのみならず、サポート室や他の部会の SLA にもご協力いただきながら、更なる飛躍の布石を打つことをここに決意し、結びに代えたい。



（３）センター員による活動報告

昨年度のライティング支援立ち上げを経て、昨年度末に重点的に新規メンバーを募集し、2015年度はライティング部会の顔触れも大きく変わった中でのスタートであった。

ライティングは「窓口対応」を中心とした活動では利用が揮わないこともあり、どのような支援の方法があるか自体を模索しながらの活動となった。そのため、部会活動のあり方としても他部会とは異なる動き方をした2015年度であった。具体的には、前期セメスターは他と変わらず月に一回の定例会を開催する動きであったが、後期セメスターは、窓口対応のためのシフト制勤務を12月までは停止し、セミナーの開催と準備・検討のための週1回のミーティングを定期的な活動とした。このセミナーの実施とミーティングは、SLAにとっての研修・勉強の場としても位置づけているものである。

また、ライティング部会のメンバー構成について検討すると、ライティング部会は最もメンバーの変動が大きかった部会であり、また、ドクター生が多いことに特徴があった。対話を中心とする文章の支援は系統的な知識の積み上げによる力量形成に抛らない部分も多く、ある程度の「論文」執筆歴を擁する院生以上の力が必要となる側面も大きい。しかし、ドクター生が多いことによって、①研究活動との競合による活動幅の制限、②「論文指導」と「レポート支援」のギャップの課題などが生じることが2015年度の活動からは見受けられた。活動自体の方を検討し直す事も可能であるが、いずれにせよ、構成員と活動内容のバランスを調整していくことが今後必要になると考えられる。

（足立）